

—— 千葉県市原市 ——

むら かみ じょう あと
村 上 城 跡

1986

市原市教育委員会
財団法人 市原市文化財センター

序 文

市原市は自然環境に恵まれ、原始・古代の昔から現代に至るまで多くの人達の生活の場となり、また、その人々の手によって発展してきました。

このため、市域には、その歴史の発展の跡を記す埋蔵文化財が数多く残されており、これを保存・活用し後世に継承してゆくことは、現在の我々市民に課せられた課題と言えましょう。

また一方、本市は京葉工業地帯の中心地として、それに伴う道路網の充実、住宅の造成、ゴルフ場建設などが増加の一途をたどっており、これらの地域開発と埋蔵文化財保護との調和の必要性が高まっております。

今回ここに報告する村上城跡は、市原市村上地先における小学校プール建設に伴う記録保存を目的とする調査であり、教育施設整備と埋蔵文化財保護との関係の調整につき、関係諸機関の協力を頂いて発掘調査を実施いたしました。

本報告書は、この調査の成果をまとめたもので、学術的な資料としてはもとより、社会教育あるいは学校教育上の資料として埋蔵文化財の保護・普及の為に広く活用されることを望んで止みません。

終わりに、市原市教育委員会教育企画課の御協力と千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会文化課の御指導にお礼申し上げます。

昭和61年3月31日

財団法人 市原市文化財センター
理事長 星 野 一 郎

調査に至る経緯

村上城跡の発掘調査は、市原市村上1402～1他に所在する市立国府小学校のプール新設事業に先行して実施した記録保存のための調査であった。

市立国府小学校については、教育施設の整備充実を計るため、昭和58年度より一部学校用地の拡張をも含めた校舎の全面改築を実施することとなった。しかし、この学校用地を含む市原市村上の微高地上は、古代における上総国府の一推定地に比定されており、また、当小学校の北側に隣接する字「堀ノ内」を中心とする地域は、中世の村上城跡の所在地としても、知られているところであった。

このことから、校舎部分については昭和57年10月18日付け、また、プール部分については昭和58年12月13日付けにて市原市教育委員会教育長より千葉県教育委員会教育長宛「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて(照会)」を提出した。これに対し千葉県教育委員会教育長より土師器散布地の回答があったので、その後の取扱いについて千葉県教育庁文化課・市原市教育委員会教育企画課および同文化課の三者にて協議を繰り返した結果、記録保存の措置を講ずることとなった。

調査については、まず学校用地北半部にあたる新校舎建設予定地について昭和57・58年度に確認調査を実施した。調査に要した期間は下記に示すとおりであったが、いずれの調査においても遺構の存在は確認されておらず、遺物の包蔵も認められなかった。

今回の調査は、上記の調査に引きつづいて実施した第三次調査であった。記録保存対象区域500㎡全域について、昭和59年4月2日より調査が開始された。

[国府小学校に伴う調査経過]

第一次調査	校舎部分…昭和58年3月1日～昭和58年3月31日	1,400㎡の10%の確認
第二次調査	校舎部分…昭和58年7月2日～昭和58年7月19日	780㎡の10%の確認
第三次調査	プール部分…昭和59年4月2日～昭和59年5月12日	500㎡の確認・本調査

(市原市教育委員会文化課)

例 言

1. 本書は、千葉県市原市村上^{ムラガミ}地先における市原市国府小学校のプール新設工事に伴い事業に先行して実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書に所収する内容は、市原市村上に所在する村上遺跡群のうち、いわゆる「村上城」（永昌寺旧寺院地内）にかかるものである。
3. 発掘調査は、市原市教育委員会教育企画課より委託を受け、財団法人市原市文化財センターが実施した。尚、調査にあたっては、千葉県教育委員会文化課・市原市教育委員会文化課の指導を受けている。
4. 調査対象の面積は、500㎡であった。
5. 確認・本調査ならびに整理作業にかかる期間は、以下のとおりであった。
確認・本調査 昭和59年4月2日～昭和59年5月12日
整理作業 昭和60年4月1日～昭和61年3月31日
6. 調査ならびに整理作業は、山口直樹が担当した。
7. 遺物の実測・挿図版組・観察表作成・写真撮影・写真図版作成は山口直樹が行ない、本文執筆は山口直樹と田所 真とで分担した。また、「調査に至る経緯」については、市原市教育委員会文化課にお願いした。本文執筆の分担は以下のとおりである。
Ⅱ・Ⅲ・Ⅵの各章……………山口直樹 Ⅰ・Ⅳ・Ⅴの各章……………田所 真
8. 調査による出土遺物ならびに記録類は、財団法人市原市文化財センターがこれを保管している。
9. 調査コードは、(セー17)である。
10. 本書に使用した方位は座標北である。
11. 本書で使用した地図・地形図は以下のとおりである。
図1…1979年 藤原文夫「養老川」『市原市史(別巻)』の第48図を略写
図2…国土地理院発行 1:25,000五井 N1-54-19-15-4(S57修正)
国土地理院発行 1:25,000姉崎 N1-54-19-15-5(S57修正)
図3…参謀本部陸軍部測量局(迅速測図)二万分之一之尺 五井村 明治15年測量
図4…国土地理院発行 1:50,000千葉 N1-54-19-15(S58修正)
国土地理院発行 1:50,000姉崎 N1-54-19-16(S58修正)
図5…1985年 田所真「上総国府跡推定地(確認調査)」『市原市文化財センター年報 昭和57・58年度』のP28の図をそのまま使用
図6…市原市地形図D-4 1:2,500 昭和55年測図
図7…市原市地番図D-4 1:2,500
12. 調査および整理にあたっては、下記の方々に御協力を賜わった。謝意を表する次第であります。

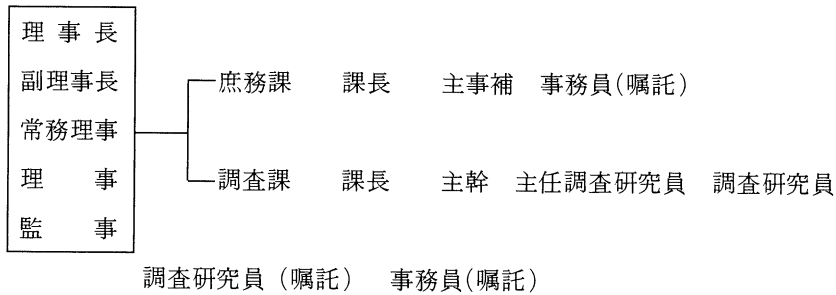
市原市教育委員会教育総務部教育企画課、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会教育指導部文化課、国府小学校、中野泰弘(愛知県陶磁資料館学芸員)、稲見英輔(国学院大学学生)、加藤正信(千葉県文化財センター主任調査研究員)、千葉県城郭研究会

調 査 組 織 表

組 織

役員

職員



昭和59年度

所 属	職 名	氏 名
庶務課	課長	小茶文夫
	主事	浅利幸一
	主事補	相野光江
	事務員(嘱託)	秋田晴美
	事務員(嘱託)	塚本和江
調査課	課長	郷田良一
	主任調査研究員	山口直樹

調査課	調査研究員	宮本敬一
	調査研究員	米田耕之助
	調査研究員(兼)	浅利幸一
	調査研究員	近藤敏
	調査研究員	高橋康男
	調査研究員	田所真
	調査研究員(嘱託)	鈴木英啓
	事務員(嘱託)	高浦貞子

昭和60年度

所 属	職 名	氏 名
庶務課	課長	田丸萬富
	主事補	大鐘光江
	事務員(嘱託)	秋田晴美
	事務員(嘱託)	藤沢ひとみ
	事務員(嘱託)	石渡あゆみ
調査課	課長	清藤一順
	主幹	石田広美
	主幹	山口直樹
	主任調査研究員	宮本敬一
	調査研究員	米田耕之助

調査課	調査研究員	田中清美
	調査研究員	近藤敏
	調査研究員	高橋康男
	調査研究員	田所真
	調査研究員	浅利幸一
	調査研究員	大村直
	調査研究員	木對和紀
	調査研究員(嘱託)	鈴木英啓
	調査研究員(嘱託)	半田賢三
	調査研究員(嘱託)	田中新史
	調査研究員(嘱託)	高浦貞子

村上城跡

目次

序文

調査に至る経緯

例言

I	遺跡の位置と地理的環境	1
II	歴史的環境	4
III	遺跡の概観	13
IV	検出遺構	14
	1. 1号遺構	14
	2. 2号遺構	14
	3. 3号遺構	14
	4. 4号遺構	14
	5. 5号遺構	14
	6. 6号遺構	14
	7. 旧河道	14
V	出土遺物	20
	1. 出土遺物の概要	20
	2. 土師器	20
	3. 須恵器	20
	4. 土師質杯形土器	22
	5. 土鍋	22
	6. 中近世陶器	22
	7. 中世石塔	31
	8. 布目瓦	31
	9. 貨幣	36
	10. その他の遺物	36
VI	まとめ	38

図版目次

- 図版1. 遺跡 村上城跡周辺航空写真 (1967年3月撮影 1:13,000)
- 図版2. 遺跡 1. 遺跡遠景 (南東側よりのぞむ)
2. 遺跡遠景 (南東側みりのぞむ)
- 図版3. 遺跡 1. 遺跡遠景 (南東側よりのぞむ)
2. 基本土層
- 図版4. 遺構 1. 1号遺構全景 (北西側よりのぞむ)
2. 1号遺構近景 (西側よりのぞむ)
- 図版5. 遺構 1. 1号遺構全景 (南東側よりのぞむ)
2. 1号遺構北半部遺物出土状況 (東側よりのぞむ)
- 図版6. 遺構 1. 1号遺構北西半部遺物出土状況 (東側よりのぞむ)
2. 1号遺構北西半部遺物出土状況 (南東側よりのぞむ)
3. 1号遺構南東部遺物出土状況 (南東側よりのぞむ)
- 図版7. 遺構 1. 旧河道の状況 (南東側よりのぞむ)
2. 2号遺構全景 (南側よりのぞむ)
- 図版8. 遺構 1. 3号遺構全景 (北東側よりのぞむ)
2. 4号遺構近景 (西側よりのぞむ)
- 図版9. 遺構 1. 4号遺構周辺近景 (北側よりのぞむ)
2. 4号遺構全景 (北側よりのぞむ)
3. 4号遺構全景 (北西側よりのぞむ)
- 図版10. 遺構 1. 5・6号遺構検出状況 (北側よりのぞむ)
2. 5号遺構全景 (北側よりのぞむ)
3. 6号遺構全景 (北側よりのぞむ)
- 図版11. 遺物 土師器・須恵器・土師質杯形土器・土鍋・陶器
- 図版12. 遺物 陶器
- 図版13. 遺物 陶器
- 図版14. 遺物 石塔・板碑
- 図版15. 遺物 布目瓦・貨幣・その他

挿 図 目 次

図1.	養老川下流域微地形分類図	1
図2.	養老川下流部川跡分布図	3
図3.	村上村周辺旧地形図	5
図4.	養老川下流域城館跡分布図	6
図5.	上総国府跡推定地周辺の小字	8
図6.	村上城跡周辺地形図	9
図7.	村上城跡周辺地籍図	11
図8.	調査区全体図	13
図9.	1号～4号遺構・旧河道実測図(1)	15
図10.	1号～4号遺構・旧河道実測図(2)	17
図11.	1号～4号遺構・旧河道実測図(3)	18
図12.	5・6号遺構実測図	19
図13.	遺物実測図(1)土器類	23
図14.	遺物実測図(2)陶器	25
図15.	遺物実測図(3)陶器	26
図16.	遺物実測図(4)陶器	31
図17.	遺物実測図(5)石塔	32
図18.	遺物実測図(6)石塔	33
図19.	遺物実測図(7)布目瓦	34
図20.	遺物実測図(8)貨幣	36
図21.	遺物実測図(9)その他	37

表 組 目 次

表1.	村上城周辺の城館跡一覧表	7	表2.	遺構・遺物別出土数一覧表	21
表3.	土師器一覧表	22	表4.	須恵器一覧表	24
表5.	土師質杯形土器一覧表	24	表6.	土鍋一覧表	24
表7.	中近世陶器一覧表	27	表8.	中世石塔一覧表	33
表9.	布目瓦一覧表	35	表10.	貨幣一覧表	36
表11.	その他の遺物一覧表	37			

I. 遺跡の位置と地理的環境

市原市は、千葉県の中央南西寄り、房総半島の西北部に位置し、東京湾岸の八幡宿～姉崎より内陸へ延びて養老溪谷に至る旧市原郡の全域を包括する地域である。

地形的には、南部に北-北北西の単斜構造を有する上総丘陵が聳え、北部に浅い谷を樹枝状に発達させた上総台地が続いている。市域のほぼ中央を南北に縦断する養老川は、その源泉を清澄山系に発する二級河川であり、両岸に河岸段丘面を、また、下流域には沖積地と三角洲性低地とを形成して東京湾へと注いでいる。

この養老川における沖積地は、北部下流域では比較的広い展開を見せているが、南部中・上流域では急激に狭くなり、また複雑に蛇行する本流および多くの支流によって、低地平坦面が



図1 養老川下流域微地形分類図

分断されている。中～下流域に著しく発達した河岸段丘は、基本的には三段の面に分かれ、これも下流域では連続した比較的広い平坦面であるのに対し、上流域に向かうに従って不連続かつ狭隘となっていく。(文献a・b)

今回調査を実施した「村上城」の地籍は、市原市村上1402～1である。内房線五井駅より小湊鉄道で一駅の上総村上駅が最寄であり、西南に直線距離で約300mの市原市立国府小学校地内に位置している。第9糸座標 $X = -56.43 \cdot Y = +23.90$ の交点を含む500㎡が調査対象区域であった。

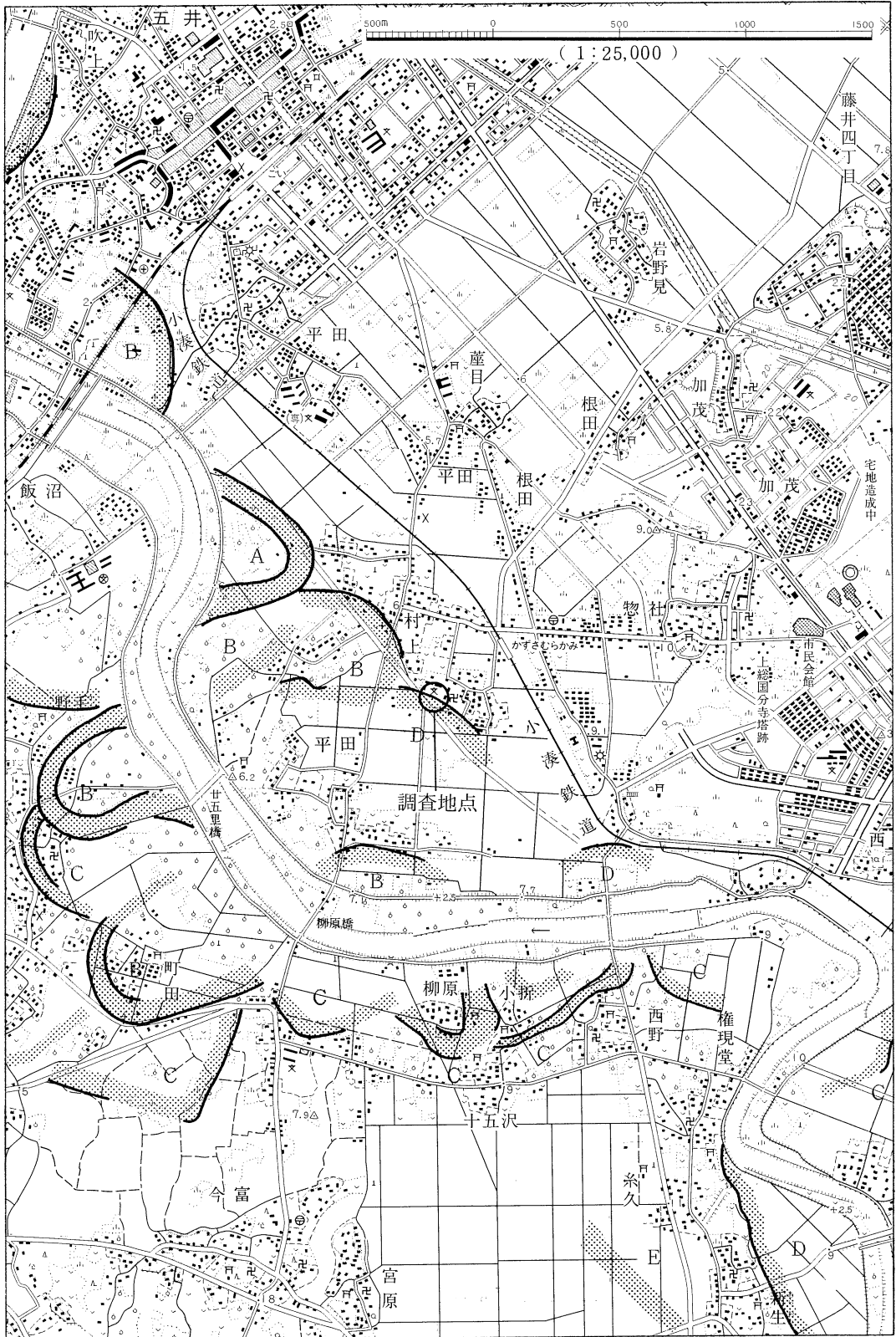
本遺跡は、養老川最下流域左岸にあって、養老川沖積地と海岸平野とに狭まれた洪積世台地直下の自然堤防上に立地している。(文献c)遠藤秀典の報文に依れば、この地の沖積谷埋積堆積物の層厚は20m前後であり、細粒ないし中粒砂からなる砂層によって形成されている。(文献d)表層堆積物は自然堤防堆積物として区分されるものであろう。

調査区を取り巻く地理的景観は、東側の自然堤防上に展開する村落と西側の水田とに分けられる。現水田面と村落との比高差は、最大でも1.5mを測るにすぎない。調査区は、ちょうど、この地理的景観の分枝点の一角にあたっている。

現水田面は、上述にも明らかなように、旧養老川河道であるが、この旧河道の形成期については、縄文海進期とする樋口義幸の見解が既に公表されている。(文献e)今回の調査では、この点について新たな知見を得るに至っていないが、川欠後も水路としての機能を維持していたであろうことは、後述縷々にて明らかなるであろう。

村落景観の立地する自然堤防上では、調査区は最も低い位置にあっており、最も高所に位置するのは、「堀ノ内」「宿」といった小字地区である。

- 文 献 a : 木村泰治「市原の地形と地質」『市原市史(別巻)』市原市教育委員会(1979)
b : 山口直樹『血郷田茂遺跡』財団法人市原市文化財センター(1984)
c : 山口直樹「村上城跡(上総国府推定地)」『市原市文化財センター年報-昭和59年度』財団法人市原市文化財センター(1984)
d : 遠藤秀典「VI. 久留里段丘推積層及び沖積層」『姉崎地域の地質』地質調査所(1984)
e : 樋口義幸「第5節 養老川下流地域」『市原市史(別巻)』市原市教育委員会(1979)



旧河道 / (段差) 推定時期 (A-明治以後、B-江戸時代、C-江戸時代前、D-縄文海進後)

図2 養老川下流部川跡分布図

Ⅱ. 歴史的環境

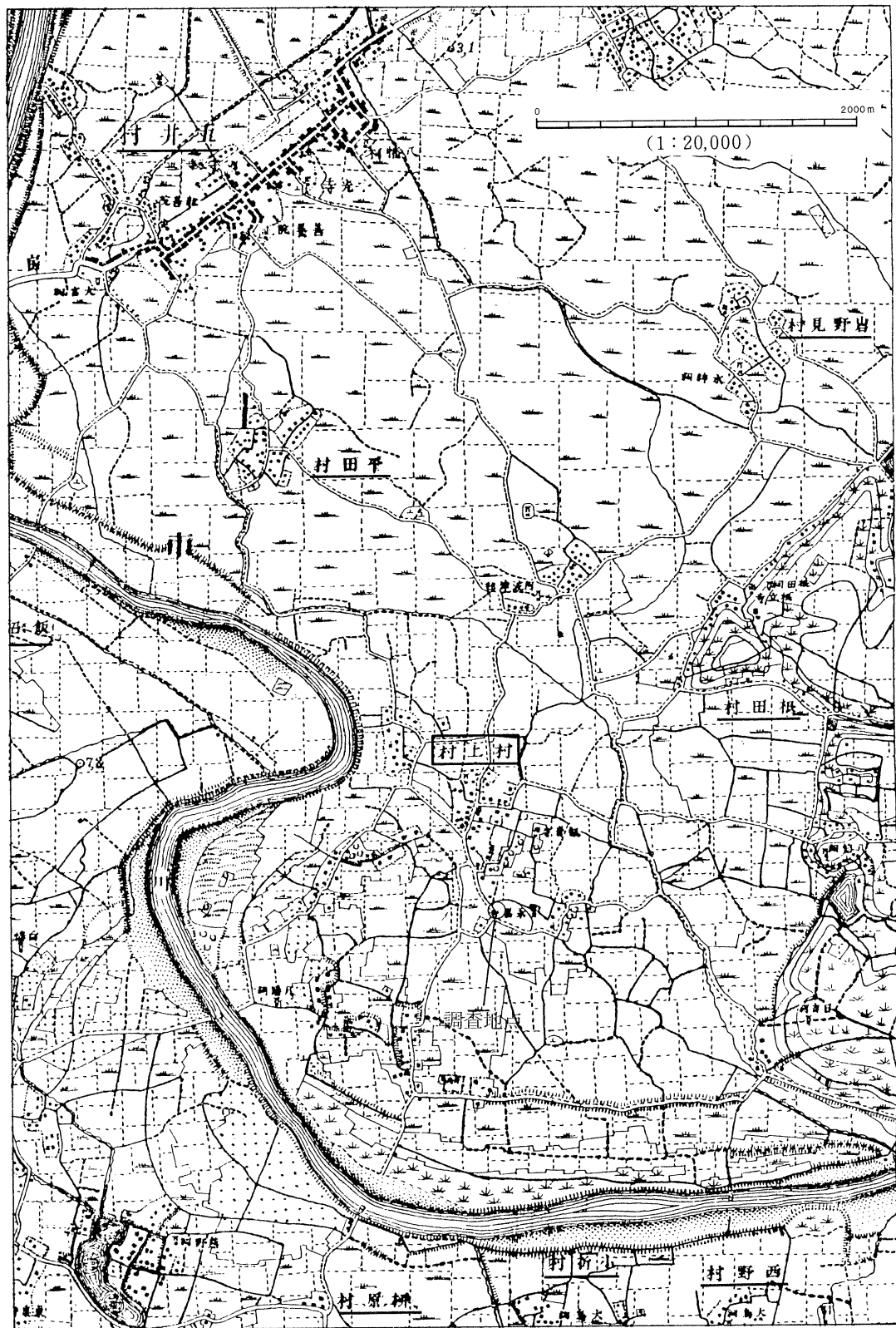
「村上城」は、『上總國町村誌』(明治22年刊行)において「鶴岡安宅云フ村上城址有り村上大蔵大輔義芳之ニ居ルト其地今詳ナラス」と紹介されているが、根拠となる史料は明示されておらず、その存在は不確実である。しかし、「村上城」の存在を推定できる史料には以下の4件(市原市史資料集(中世編)所収)がある。

- (1). 治承6(1180)年4月12日「飯香岡八幡宮由緒本記」
- (2). 永祿3(1560)年?10月9日「古河公方足利義氏朱印状」(喜連川文書)
- (3). 永祿3(1560)年10月14日「北條家朱印状寫」(下總舊事 五)
- (4). 天正18(1590)年5月「豊臣秀吉禁制」(榊原ヨシ家蔵)

このうち(1)には、頼朝より寄進された神領の中に「市原郡市原庄 村上村」が見られるが、「由緒本記」の成立年は不詳で、その性格からも、治承6年における「村上村」の存在は不確実と言えるが、参考として掲げた^(註1)。(2)は、足利氏の命により北条氏康が村上民部大夫に「浅井村・嶋野道」を充当させたもの。(3)はこれと対をなす史料で、後北条氏が村上民部大輔に「泉之郷・嶋之郷・町田郷・津比地郷・引田・麻井郷・梶路郷・風戸郷」の八郷の不入権を与えるとともに、椎津城の普請役を申し付けており^(註2)、村上氏の知行地及び、後北条氏の勢力範囲を示している(8郷のうち比定不能な泉之郷を除く7郷を図4に示した)。この村上民部大輔と村上城との関わりは明確ではないが、知行地の分布からすると本遺跡のある「村上」とは無関係とは思われない。ただ、知行地が養老川対岸であることや泉之郷の所在が不明であること、後北条氏の支配領域の範囲が不明であることなど、その関わり方ははっきりしない^(註3)。(4)は「上總國市原庄」の「八幡郷・そう志や・きくま・村上・屋ま紀・ごい・府中・ご志よ」に出された禁令で、同年に後北条氏を滅ぼす秀吉による支配の影響を示している。いずれにしても「村上」及び「村上」地名の明確な初現は現在のところ16世紀といえよう^(註4)。また、本調査での出土遺物は16世紀以降であり、「村上城」の存在もこの時期を中心に考えられる。

周辺の城郭分布は図4・表1のとおりである。これらは未調査のため成立～存続の時期、村上城との併存関係は不明であるが、「中世末」という大きな枠の中での分布は、①本遺跡を含む養老川東岸最下流～海岸平野の地域(1～5)、②養老川西岸最下流域の椎津城を核とする地域(6～8)、③養老川西岸下流の「^{カジロ}神代・^{コウサカ}高坂」地域(9～13)、④養老川西岸中流域の地域(14)、⑤養老川～小櫃川間の川原井地区^{カワライ}(15,16)に分けて捉えることができる。

城の成立条件としては、村落や道路に規定される場合が強いと思われるが、上記分布の特徴を特に道路との関係で捉えると、いわゆる「鎌倉街道」との関係が目される。鎌倉街道は、図4では、西南の「萩原野」から中央東寄りの「^{ワシメ}分目」に向かって走っており、この図の範囲内



(明治15年 参謀本部迅速図)

图3 村上村周边旧地形图



(1:60,000)

图4 養老川下流域城館跡分布図

でも袖ヶ浦町^{クラナミ}蔵波「鎌倉街道」、川原井^{カワライ}「鎌倉通」、市原市^{ナカタカネ}中高根「大街道」、立野^{タテノ}「鎌倉街道」の小字名を今に残している。また、鎌倉街道の通過する^{ナカタカネ}「中高根・^{カザト}風戸」地区の養老川段丘面と「引田」地区には、風戸日光寺の木造聖観音立像(藤原末)、中高根鶴峯八幡宮の神楽、中高根常住寺の五輪塔と宝篋印塔(鎌倉期)、引田蓮蔵院の木造聖観音菩薩立像(藤原末)など古代末～中世関係の文化財が集中しており、幹線道路の存在を裏付けている。鎌倉街道は風戸付近から不明確になってしまうが、現在の道路や地形からは、幹線または支線のいずれかの路線が、分目周辺地区～(渡河)～村上周辺地区にあったと思われる^(注5)、その要所として③・①の分布を捉えることが可能である。なお⑤の分布は、台地上に平坦面を求めている「鎌倉街道」に対して、これと並行して谷の中を走る路線(袖ヶ浦町上泉－川原井－市原市上高根)を意識しており、枝線あるいは路線変更などが考えられる。こうした道路との関係で捉えると、「村上城」は養老川下流域東岸の沖積面上にあって、西岸を望む最前線に突出する位置にあり、特異な存在となっている(図3)。

表1 村上城跡周辺の城館跡一覧表

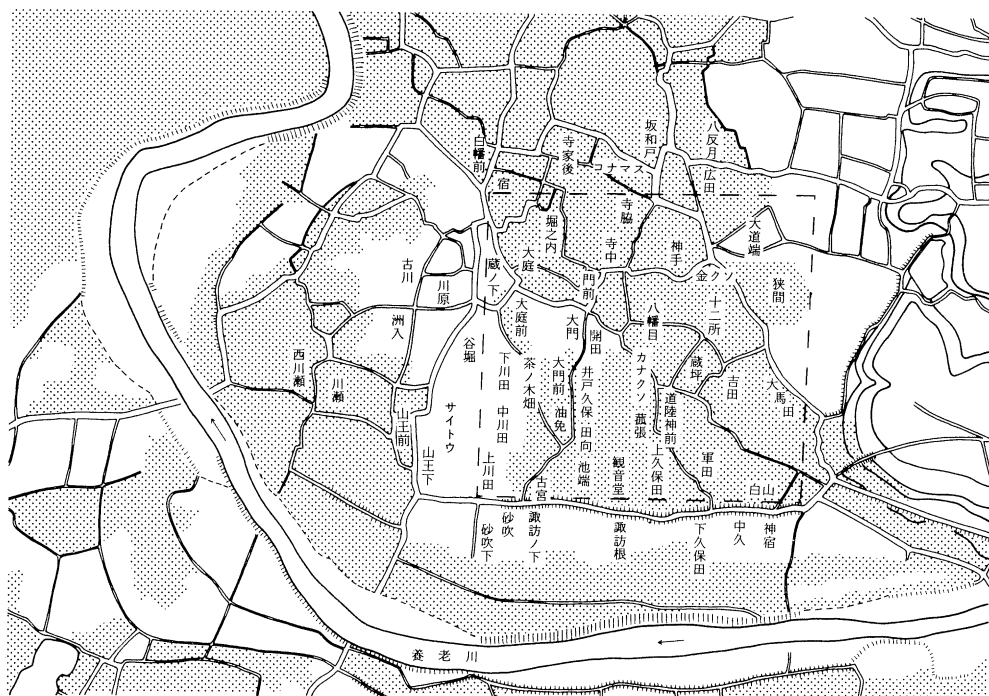
No.	名称	特徴	築造時期	備考	文献
1	君塚城跡	—	—	踏査による発見	なし
2	五井陣屋跡	単郭方形	戦国末		a. b. c
3	岩野見城跡	—	—	踏査による発見	なし
4	根田城跡	—	—	踏査による発見	なし
5	村上城跡	—	戦国		a. b. c
6	要害山城	単郭不規模雑形	戦国		a. b
7	椎津城	単郭不規模雑形	戦国		a. b. c. d
8	鶴牧陣屋	—	江戸		a. b. c
9	宮原御所	単郭方形	戦国		a. b. c
10	神代城跡	—	—		c
11	分目城跡	—	—	踏査による発見	なし
12	万台城跡	—	戦国		a. b
13	高坂の砦	多郭雑形	戦国		a. b. c
14	南岩崎砦	多郭雑形	戦国		a. b. c
15	里見城	—	—		a. b
16	川原井陣屋	単郭方形	—		a. b

- 文献 a:1971年 千葉県教育委員会『千葉県中近世遺跡調査目録』
 b:1978年 千葉県企画部企画課『千葉県埋蔵文化財分布図』
 c:1980年 須田勉, 落合忠一, 鈴木英啓他『日本城郭大系6 千葉・神奈川』
 d:1973年 伊禮正雄『椎津城の歴史』市原市教育委員会

注:1.3.4.11は市原市文化財センター調査研究員 鈴木英啓の踏査による。

- 注1 「村上」地名の古さは、村上氏の出所及び「村上城」の出現期を考える上で重要である。
- 注2 椎津城は周辺地域の中心的城郭で、豪族による陣取りの歴史が明らかにされている。「村上城」は常に、椎津城の影響を受けていたものと思われる(文献d)。
- 注3 比定可能な7つの地名はほぼ3地区に分かれており、南から北に向かって記載されている。この記載方法に規則性があるとすれば、「泉之郷」は養老川下流域の村上地区周辺に求められる。参考文献hでは君津氏「泉」をあげており、また図4左下には袖ヶ浦町「上泉」・「下泉」の地名がみられる。椎津城及び7郷は養老川沖積地に沿った地域であるが、この枠を越えての西側での知行地の存在は、後北条氏の支配領域とも関係する問題である。
- 注4 房総における「村上氏」は史料に散見されるが、本遺跡の立地する村上と直接結びつくものはない。なお、房総「村上氏」としては八千代市米本城のそれが、よく知られている。
- 注5 参考文献eでは、鎌倉街道の養老川渡河地点についての明確な記述はないが、「想像の鎌倉街道」として海上郡家(小折に比定)と上総国府(総社に比定)を通過する想定線が地図に書き込まれており、「権現堂」付近で渡河している。

文献 e：1933年 小熊吉蔵「鎌倉街道」『史蹟名勝天然記念物 第10輯』千葉県
 f：1980年 市原市教育委員会『市原市史資料集(中世編)』
 g：1982年 柴辻俊六「後北条氏の両総支配」『論集 房総史研究』名著出版
 h：1984年 『角川日本地名大辞典 12千葉県』株式会社角川書店



本図は1985 田所真「上総国府推定地(確認調査)」
 『市原市文化財センター年報昭和57・58年度』P28の図
 をそのまま使用している。

図5 上総国府跡推定域周辺の小字



図6 村上城跡周辺地形図

本図は昭和55年測図 市原市地形図D-4 (二千五百分の一)を使用した。



図7 村上城跡周辺地籍図 (図6と同一範囲)

本図は市原市地番図D-4 (二千五百分の一) を使用した。

Ⅲ．遺跡の概観

調査区は北東側が自然堤防、南西側が旧河道であった。旧河道は小学校の校庭拡充によって埋め立てられており、自然堤防縁辺部には、かつて道路があった(図3・7, 図版1参照)。発掘によると自然堤防上には縁辺部に沿って深さ約1.4mの堀があり、調査区北西部で複雑に分岐している(図8)。自然堤防の縁辺部は旧河道に向かって階段状に人為的に削られており(図8・9, 図版7)、段差部に近世墓石を横にして埋め込み、土留としていた。自然堤防縁辺部における確認面での遺構の在り方は、〈旧河道〉-〈数m幅の平坦面〉-〈約4m幅の堀〉-〈自然堤防上平坦面〉となる。調査区南東隣接地には堀と同一方向に走る土塁が現存しているが(図版3-1, 4-1)、これを調査区内に延長すると、〈数m幅の平坦面〉上になり、堀の外側に土塁があったことになってしまう。調査区付近では土塁・堀が複雑な構造で構築されていたようである。

遺物は、茶器等の陶器類が多数出土し一般集落とは異なる遺跡の性格を示している。ただ、主体となる遺物に石塔類(板碑・五輪塔・宝篋印塔)があり、銅製香炉の出土や近世土葬墓の検出と併せて、調査区東側に現存する「永昌寺」につながる中世寺院の存在が示唆された。陶器類も寺院に伴う可能性が強いが、この中世寺院も村上城の一角をなしていたのであろうか。

この「村上城」に関わる史料は前章で触れたが、城郭調査では有力な手掛かりとなる現存の区割り・小字名を検討するため、現在の地形を図6に、地籍を図7に示した。なお、今回の調査区の小字は、自然堤防側が「^{モンゼン}門前」、旧河道側が「^{オオニワ}大庭」である。

遺跡が立地する自然堤防上にあつて、最も高所に位置する「^{ホリノウチ シュク}堀ノ内・宿」といった小字地区には、不自然に入り込んだ水田とクランク状に折れ曲がった道路があり、城の存在を強く示している。城関係の小字としてはこの他に「^{ババンダイ}馬場台・後口・出口」がある。また、寺院に関しては、古い地籍図(図5)では「^{ジチュウ}寺脇」?「^{ジチュウ}寺中」「^{モンゼン}門前」「^{オオニワ}大門」「^{オオニワ}大門前」の小字が連続しているが、「永昌寺」北側約20mには「観音寺」があり、また、国府との関係からも、地籍から寺域を推定することはできなかった。

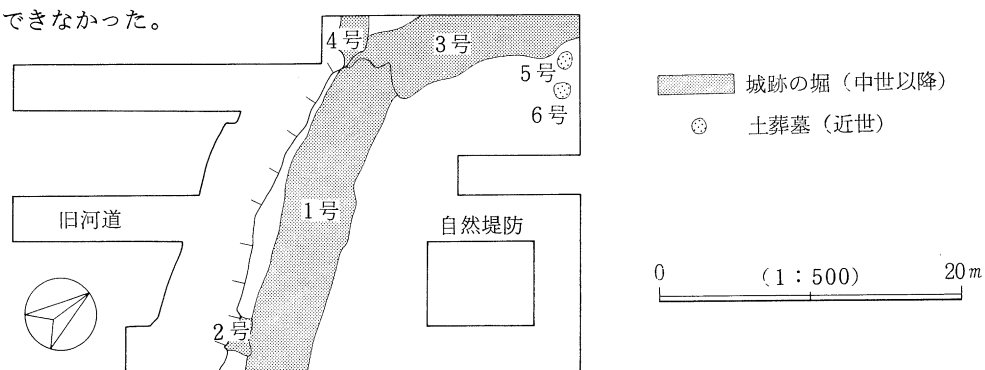


図8 調査区全体図

IV. 検 出 遺 構

1. 1号遺構 (図9・10・11, 図版4・5・6)一堀

調査区のほぼ中央に位置し、旧養老川の川岸に削り出された低地面に対して、幅2m前後の平坦面を隔ててほぼ平行に築かれている。主軸方位は、調査区内で判断する限りにおいてN-42°-Wであるが、自然堤防面にやや内湾している。幅約4m、深さ約1.4m・長さ21m以上を計測する。尚、永昌寺境内側に残存する土塁が調査区まで延びていたとするならば、おそらく、堀の外側に築かれていたであろうから、北西に隣接する平坦面は土塁の基底面であった可能性がある。この場合、低地面から土塁基底面までの比高差は80cm程度あったものと推定される。

2. 2号遺構 (図9・10・11, 図版7)一堀

1号遺構の南西寄りにおいて1号遺構と旧河道とを連絡している。幅員約2.3m・深さは最深部分で約50cm・最浅床で21cm、長さ2m前後を測る。旧河道にむかって、1号遺構側から、約30cm比高の下り勾配がみられる。また、遺構底面の横断面の形態から、三次以上の改修が想定される。主軸方位は、N-53°-Eである。

3. 3号遺構 (図9・10・11, 図版8)一堀

1号遺構の北東端部から、ほぼ南北に延びている。幅員約4m・深さ70cm強・遺構底面幅員約2.2mを測る。平底で横断面の形態が逆台形を呈している。底面の横断面には比高差が認められないが、1号遺構との連結部分において、底面レベルが1号遺構に比べ50cm程低い。

4. 4号遺構 (図9・10・11, 図版8・9)一堀

3号遺構同様、1号遺構の北東側端部から北東方向に延びている。主軸方位は、N-47°-Wであり、1号遺構に比べ5°程その軸を西に振っている。確認面からの幅員約2m・深さ60cm強を測り、遺構底面幅員は1.2mであった。横断面の形態は、逆台形を呈している。1号遺構との底面レベル差は、4号遺構の方が50cm低い。

5. 5号遺構 (図9・12, 図版10)一土葬墓

調査区の北端、3号遺構の東側隣接地に位置する。近世の座棺墓墳であり、直径1.0~1.2mのやや楕円形を呈しており、深さ1.2mを測る。覆土最上層から渡来銭系の古銭が出土しているが、副葬品は認められなかった。

6. 6号遺構 (図9・12, 図版10)一土葬墓

5号遺構の南東隣接地に位置する。5号遺構同様、近世の座棺墓墳である。直径1.0~1.1mのほぼ円形を呈しており、深さ1.2mを測る。覆土中より布が出土している。

7. 旧河道 (図9・10・11, 図版3・4・7)

拡張部分は自然堤防を人為的に削っており、砂質基盤層が確認できたが、トレンチ部分から

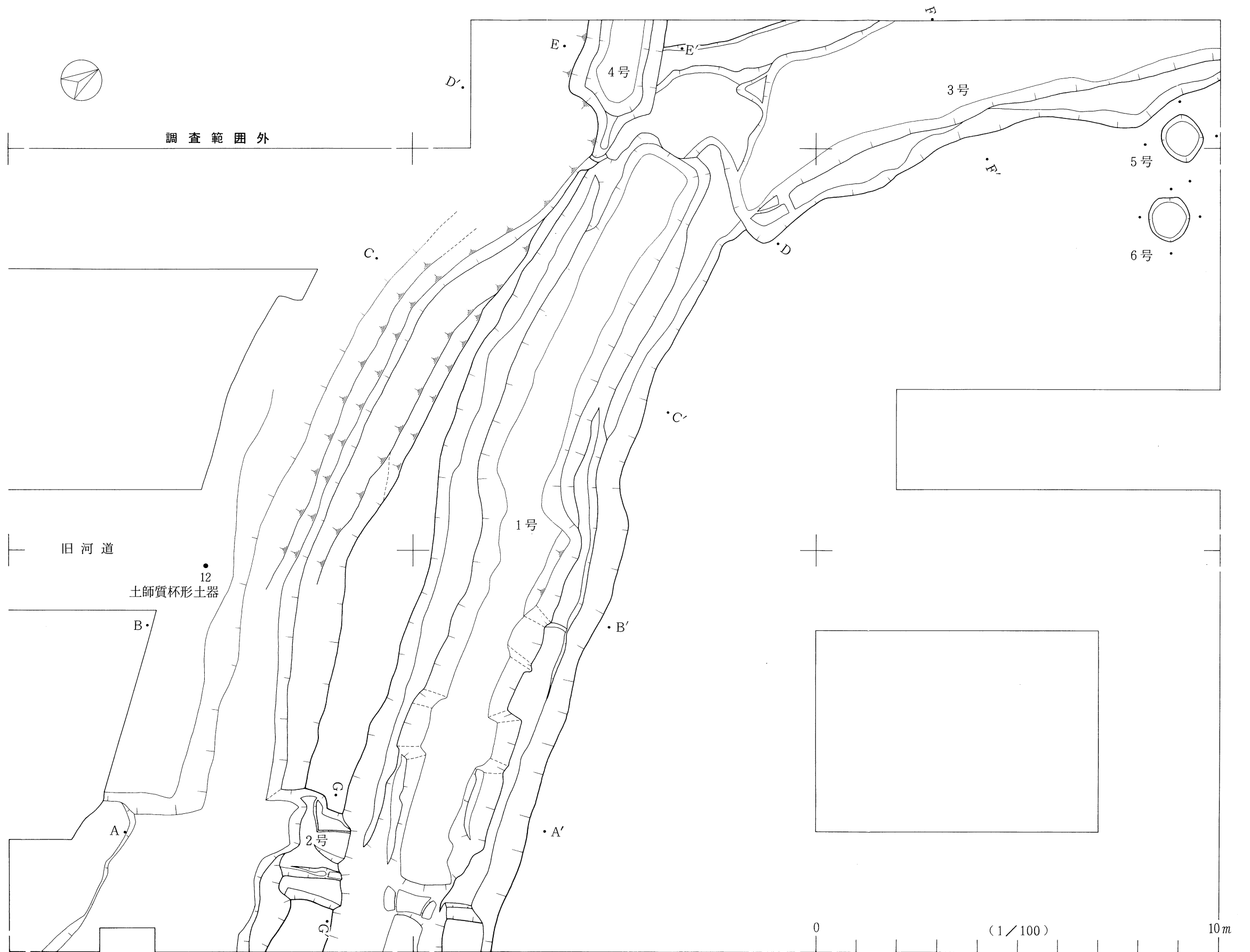


图9 1号~4号遺構・旧河道実測图(1)

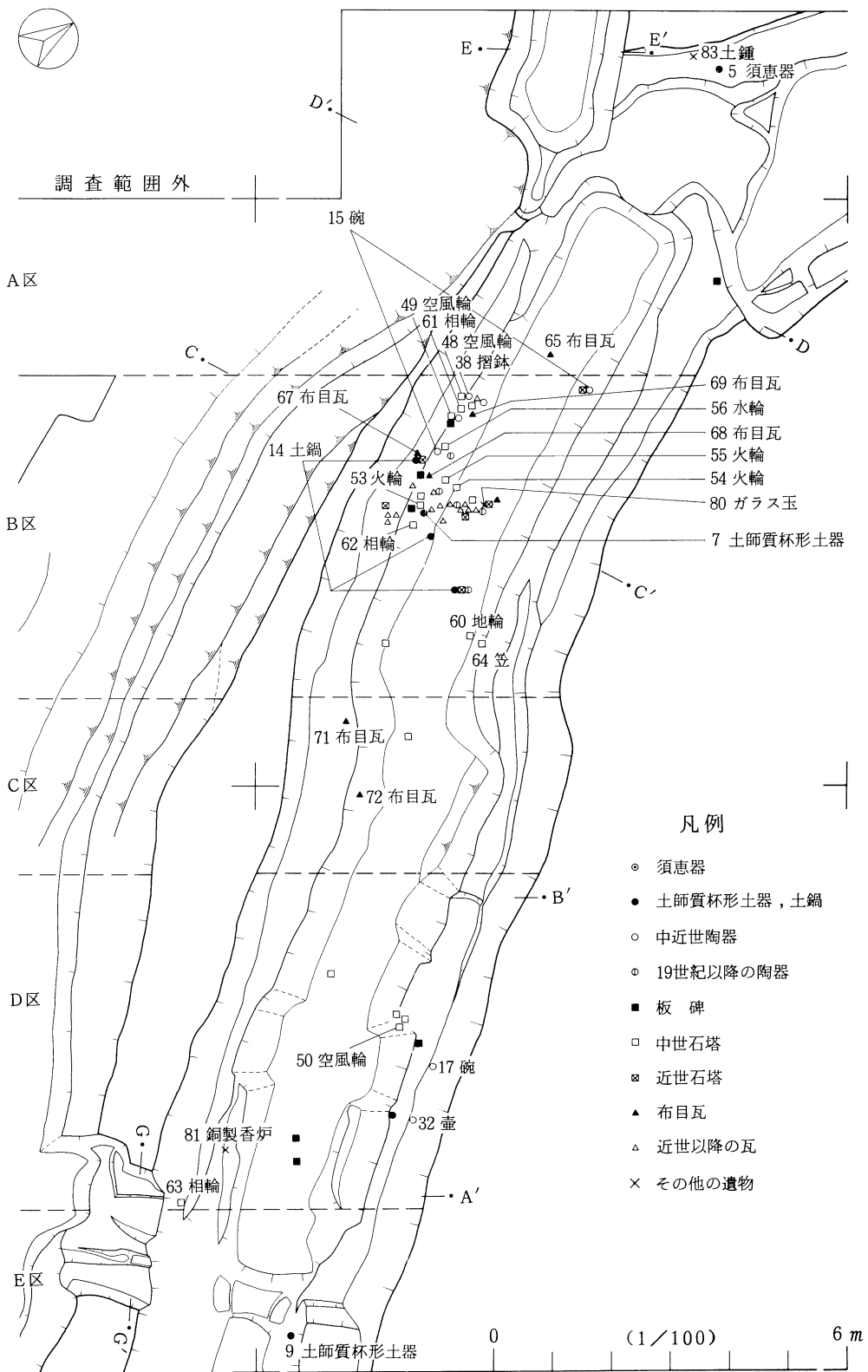


図10 1号～4号遺構・旧河道実測図(2)

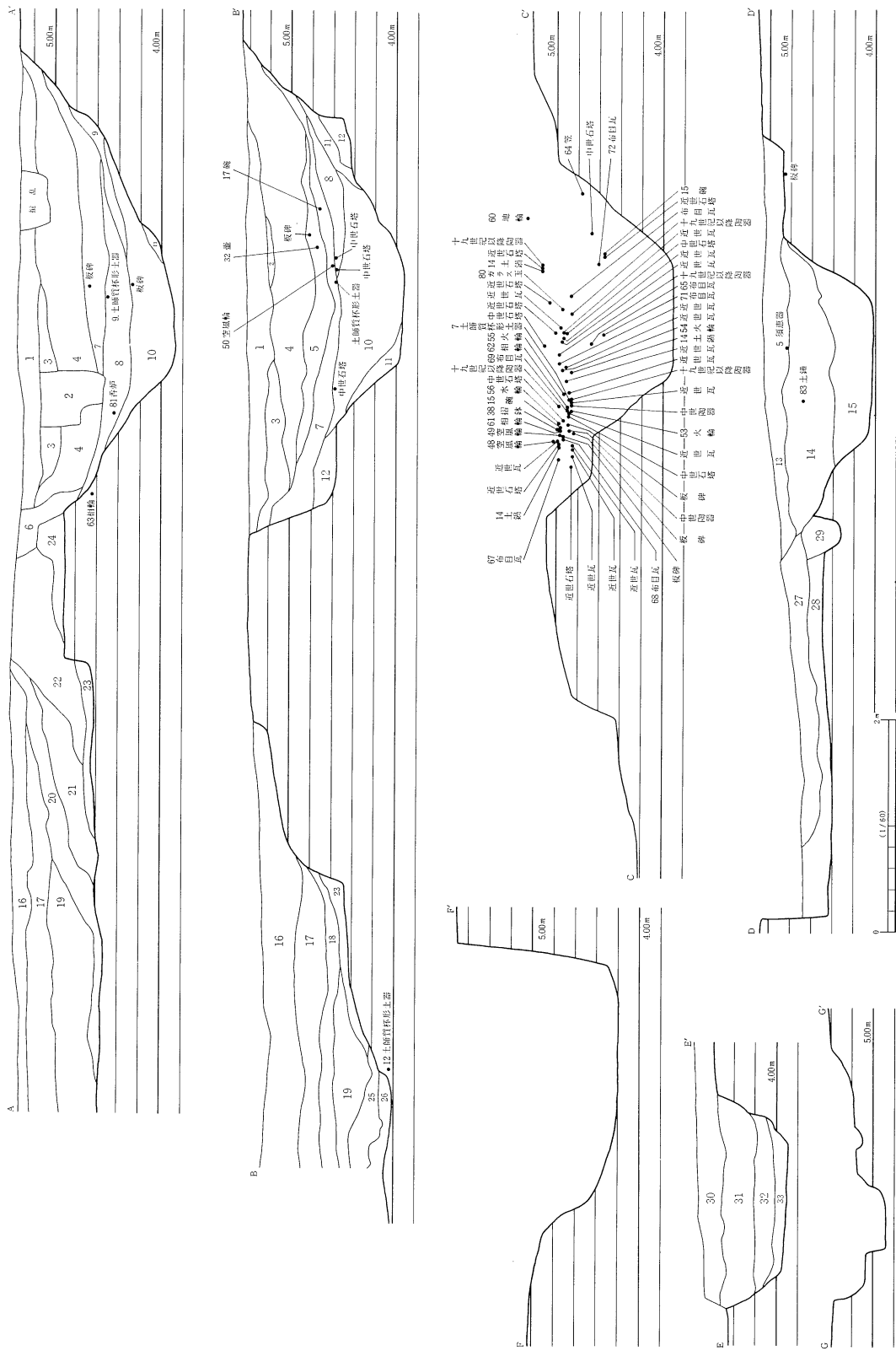


图11 1号~4号遺構・旧河道実測図(3)

急に落ち込み(本来の旧河道)、約3m掘削したが泥状層がつづいていた。

土層説明

1. 褐色。有機質土と砂との混合土。極めて新しい時期の土層。
2. 茶褐色。有機質土と砂との混合土がブロック状に入り込んでいる。締りない。
3. 暗褐色。有機性が強い。
4. 褐色～黒褐色。有機質土と砂とが互層を為している。
5. 褐色。有機質土中に淡黄色の砂のブロックがまばらに含まれる。
6. 褐色。色調は4層に近似。ただし4層に比べ砂性が強い。
7. 暗褐色。砂層。
8. 黒褐色。有機性と粘性が強い。部分的に砂を含む。
9. 黒褐色。砂層。
10. 灰緑褐色。粘性の強い層。
11. 淡緑色。地山である砂が崩れたもの。
12. 黒褐色。有機性が極めて強く、締りがある。
13. 暗褐色。有機質土と砂との混合土。
14. 黒褐色。有機質土が粘土化したもの。
15. 暗緑褐色。砂を主体とし、還元化によって緑色を呈する。
16. 淡褐色。砂性強く、有機性は弱い。ガラス・陶器類を多く含む。
17. 暗褐色。砂性、有機性ともに強い。
18. 淡褐色。淡黄色の地山砂が流れ込んでいる。
19. 暗褐色。有機性が強い。粘性もやや強い。
20. 淡黄褐色。淡黄色の砂のブロック(地山)を多く含む。
21. 淡灰緑色。有機性の強い砂質土を基本とするが、淡黄色の砂(地山)を多く含む。
22. 淡灰緑色。有機性の強い砂質土を基本とし、淡黄色の砂(地山)を含む。
23. 黒色。有機性の極めて強い土が堅まったもの。
24. 淡黄緑色。砂性の強い層。壁の崩れ。
25. 暗茶褐色。砂性強く、地山の砂を多く含む。
26. 淡緑色。地山の砂を主体とし、粘土質土がまばらに含まれる。
27. 暗褐色。有機質土と砂との混合土。13層に比べ、砂が多い。
28. 褐色。有機質土と砂との混合土。酸化してやや茶色味がかかっている。
29. 3号の溝。
30. 褐色。有機質土と砂とが混合した層。
31. 褐色。砂を主体としている。
32. 暗緑色。有機質土が粘土化したもの。
33. 淡緑色。砂層。

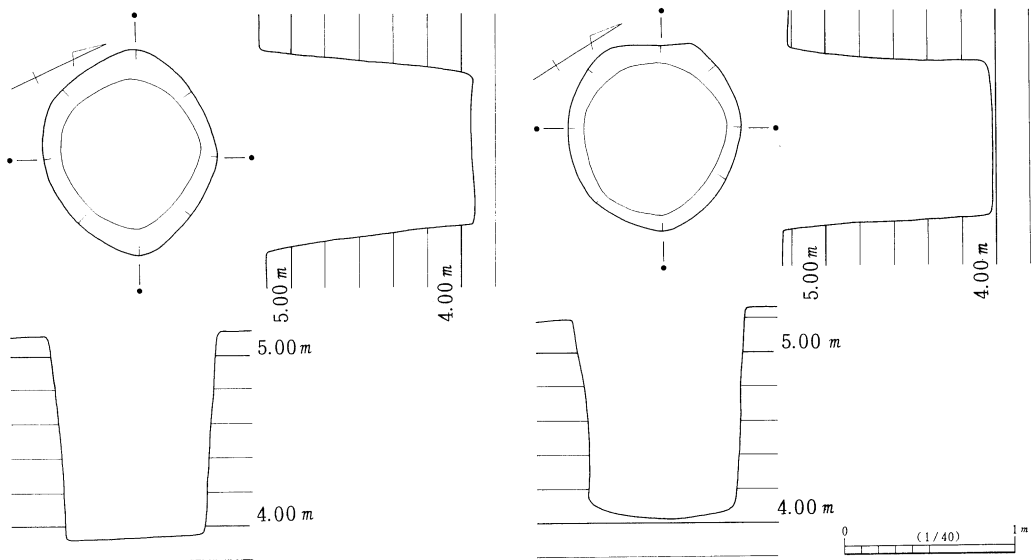


図12 5・6号遺構実測図

V. 出土遺物

1. 出土遺物の概要（表2）

調査中に出土した遺物は、1号遺構～6号遺構までと旧河道覆土遺物及び表採遺物を含めて483点であった。このうち、もっとも多くの遺物が出土したのは1号遺構であり、343点を数える。全遺物数量の71%強にあたっており、種類も最も豊富であった。一方、2号遺構覆土内には遺物が皆無であった。

次に、出土遺物の種類についてみると、土器・陶器類・石塔類・瓦・貨幣・その他の製品、自然石がみられる。土器・陶器類には土師器・須恵器・土師質杯形土器・土鍋・中近世陶器・近現代陶器がみられ、中世以降の陶器類の出土頻度が顕しく高い。このことは、遺物総体の中での時代別出土頻度においても認められるところであり、検出遺構の帰属年代を概ね反映した結果とみることができよう。

土器・陶器類に続いて出土頻度が高いのは石塔類である。これは1号遺構上層の一括資料に起因するものであろうが、翻って考えるならば、1号遺構等の堀によって区画されたであろう地区の当該期以降における歴史的な土地利用景観を反映したものとみることができよう。5号遺構・6号遺構や隣接する永昌寺との直接的な因果関係は明らかではないが、時期的な変遷の中での有機的な結びつきは、容易に想像されよう。特殊な遺物として、銅製の香炉や鍛冶碗形滓をあげることができる。各遺構の時期を決める遺物は、非常に少ない。

2. 土師器（図13，表3，図版11）

表採1点を含めて3点の土師器が出土している。出土地点の明らかな2点は、いずれも甕の破片であり、1号遺構および旧河道の上層からそれぞれ出土している。図示し得たものは図13-2に掲載した1点のみであった。

3. 須恵器（図13，表4，図版11）

1号遺構・3号遺構・旧河道からそれぞれ一片づつ3点の須恵器片が出土している。1号遺構中層覆土中より出土した口縁部小破片および旧河道D区底面出土の頸部小破片には、比較的細かい単位の波状文が施文されている。また、3号遺構上層出土の甕体部小破片には、内面上部に青海波文が残されている。小片3点の比較ではあるが、時期的に纏まった資料と考えられる。3点とも、それぞれの地点の同一層序中から土師質杯形土器が出土しており、近隣する地点からの流入であろう。先述した土師器についても同様であるが、近隣する地域の中に当該期の遺跡の存在が想定されよう。

表2 遺構・遺物別出土数一覧表

遺構	出土位置	土器・陶器類				石塔類				瓦		貨幣	その他の製品	自然石	総計		
		土師器	須恵器	土師類形土器	土鍋	中近世陶器	明治以降陶器	板	中世石塔	近世石塔	布目瓦					近世以降瓦	
1	上層	1	0	7	32	55	23	25	21	16	6	37	3	2	36	264	
	中層	0	1	5	0	8	24	3	9	2	8	6	0	0	11		77
	下層	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0		
	小計	1	1	12	32	63	47	29	30	18	14	43	3	3	47		343
2	出土遺物なし																
3	上層	0	1	2	0	2	0	2	0	0	0	0	2	1	1	11	
4	上層	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	2	0	0	2	7	
5	上層	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3	
	中層	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0		2
	下層	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	小計	0	0	2	0	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0		6
6	上層	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
	下層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0		1
	小計	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0		
旧河道	上層	1	0	12	0	22	17	6	5	5	0	3	0	3	10	84	
	中層	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	0	0	0	0		8
	下層	0	1	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0		
	不明	0	0	0	1	2	11	0	0	1	0	0	0	0	1		16
小計	1	1	13	1	24	28	8	5	14	0	3	0	3	11	112		
表採	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
総計	3	3	31	33	93	75	39	37	32	14	48	6	8	61	483		

4. 土師質杯形土器（図13, 表5, 図版11）

1号遺構・3号遺構・5号遺構・6号遺構および旧河道から合せて31点の土師質杯形土器が出土しているが、このうち図示し得たものは図13の7～12に掲載した6点のみであった。法量的には7に掲げたやや小振りのもとの8以下の100mm～110mm程度のものに分類される。8と9には図示したとおり内外面にススの付着がみられ、燈明皿として用いられたことが想定される。8～12における胎土および成作技法は類似しているが、形態的には若干の差異が認められている。

5. 土 鍋（図13, 表6, 図版11）

土鍋は33点出土している。このうちの1点は旧河道覆土よりの出土であるが、他の32点は全て1号遺構上層から出土している。図13に掲げた14は1号遺構B区の遺物集中地点から一括して出土したものである。内耳が3ヶ所に遺存しており、外面にはススの付着が観察される。

6. 中近世陶器（図14～16, 表7, 図版11～13）

陶器類は168点出土しており、このうち中・近世の所産と考えられるものは93点で、碗・香炉・鉢・壺・ハサミ皿・甕などがみられる。時期的には、17世紀を中心として16世紀から18世紀のものが多いようであるが、15世紀末の所産と考えられる小皿の小片も一点出土している。

24・25に掲げた碗の底部外面には、墨書がみられている。25のものは「衆」と読めるものであるが、24に書かれた墨書は判読しがたい。「ふ」または「小」であろうか、重ね書きされている。また、27の香炉外面には半菊文の陰刻が、31・37の鉢の内面には鉄釉の筆描きによる草文がみられる。供給地の時期的な変遷では、15世紀末以来、瀬戸産のものが恒常的に供給されており、17世紀に入って美濃産のものが、またさらに、18世紀には唐津産のものがこれに加わってくるようである。

表3 土師器一覧表

No.	遺構	出土状況	種類	遺存状況	色 調	胎 土	備 考
1	1	E区上層一括	甕	胴部細片	内面灰褐色, 外面褐色	細砂粒を多く含む	ヘラ削り。(小片のため実測図, 写真はない)
2	旧河道	D区上層一括	甕	頸部破片	内外面淡灰褐色	細砂粒を若干含む	頸部内外面横ナデ, 胴部上→下のヘラ削り。
3	表 採	—	不明	細 片	内面淡褐色, 外面淡赤褐色	細砂粒を若干含む	表面はナデ調整が行われている。(小片のため実測図, 写真はない)

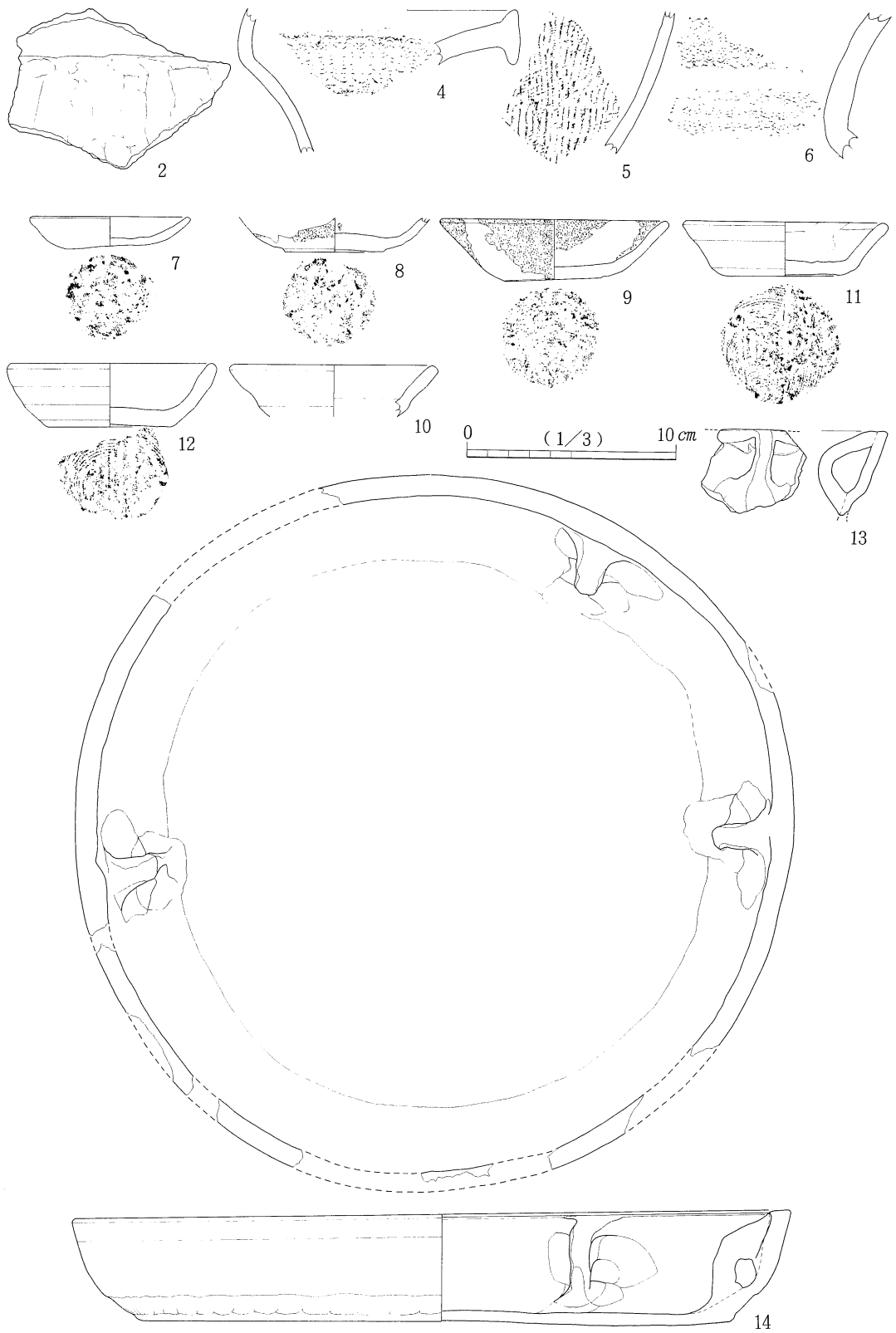


图13 遺物実測図(1)土器類

表4 須恵器一覧表

No.	遺構	出土状況	遺存状況	色調	胎土	備考
4	1	A区中層一括	口縁部小破片	淡灰色	精選されている。	10条からなる波状文が施されている。焼成良好。
5	3	上層	体部小破片	淡灰色	精選されている。	外面格子タタキ。内面上部青海波文、下部ヘラ削り。焼成良好。
6	旧河道	D区底面一括	頸部小破片	濃灰色	精選されている。	12条からなる波状文が2本施されている。焼成良好。

表5 土師質杯形土器一覧表

No.	遺構	出土状況	遺存状況	法量(mm)	備考
7	1	B区上層	口縁, 1/2 底部, 完存	口径 76.85 底径 40.50 高さ 14.75	全体的に薄く、均整がとれている。砂粒等不純物はほとんど含まない。内外面淡橙褐色。
8	"	C区上層一括	口縁, - 底部, 完存	口径 - 底径 45.60 高さ -	石英質, 雲母等の砂粒を多く含む。焼成不良。内外面にススが付着。内外面淡橙褐色。
9	"	E区中層	口縁, 1/2 底部, 完存	口径 109.35 底径 47.00 高さ 28.55	底部に回転糸切痕。底部内面に押えの指頭痕を有する。口縁～底部内外面にスス付着。石英質, 雲母等の細砂粒を多く含む。内外面淡橙褐色。
10	5	下層一括	口縁, 1/4 底部, -	口径 (10.00) 底径 - 高さ -	厚手の作りであるが、焼成良好で整っている。雲母, 白色細砂粒をまらに含む。内外面淡橙褐色を基調とし淡褐色の焼ムラがある。
11	"	上層一括	口縁, 完存 底部, 完存	口径 97.80 底径 6.70 高さ 25.95	底部外面に回転糸切痕とスダレ状圧痕、内面に押えの指頭痕を残す。良好な胎土, 焼成。厚手の作り。内外面淡橙褐色の焼ムラがある。
12	旧河道	下層	口縁, 1/3 底部, 2/3	口径 (111.05) 底径 51.95 高さ 30.05	底部は回転糸後粘土を押し延ばして貼り付けている。弱いスダレ状圧痕が見られる。底部内面に押えの指頭痕を残す。石英質, 雲母の細砂粒をまばらに含む。一部淡褐色部があるが、全体としては、暗褐色を基調とする。

注 法量の()は復元推定値。

表6 土鍋一覧表

No.	遺構	出土状況	遺存状況	色調	胎土	備考
13	1	A区上層一括	耳部破片	内外面黒褐色 断面茶褐色	細砂粒をまばらに含む。	外面はススが付着。
14	"	B区上層	1/8を欠く	内面底部灰褐色 口縁部茶褐色 外面灰褐色	金雲母を多く含む。	口縁部外面にススが付着。口径347mm, 底径285mm, 器高50mm。

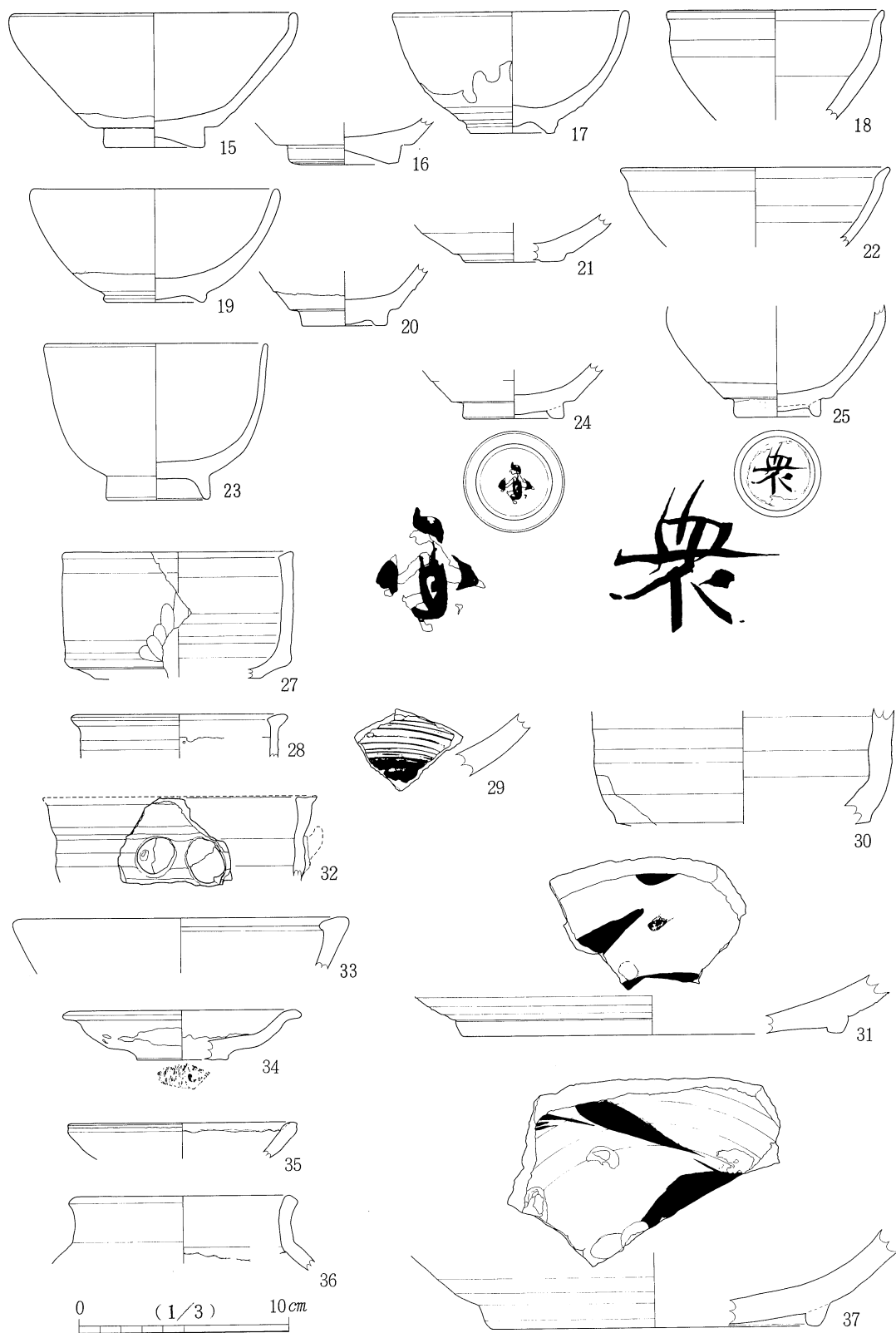


图14 遺物実測図(2) 陶器

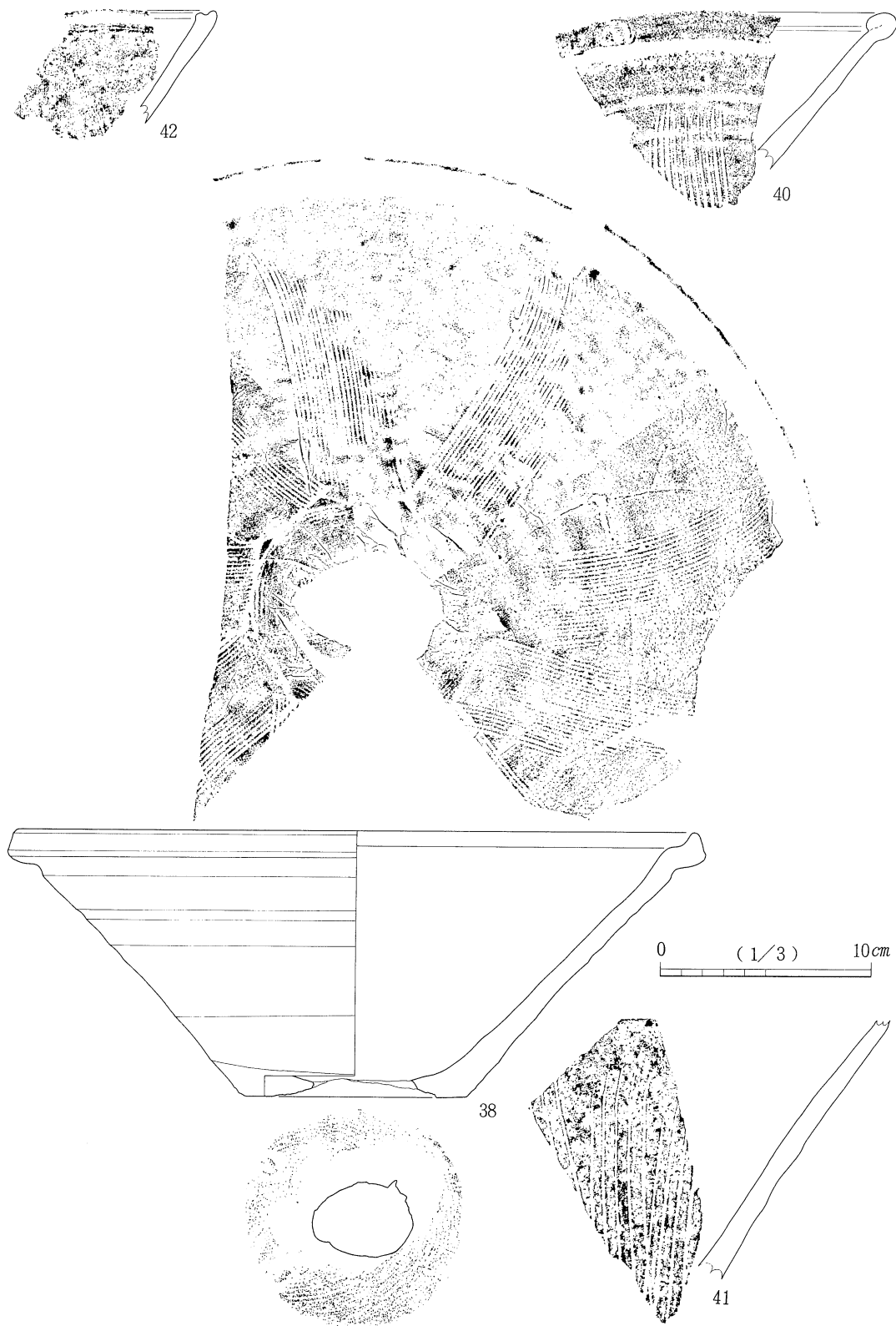


图15 遺物実測図(3)陶器

表7 中近世陶器一覧表

遺物 No.	遺 構 出土層位	器 種	法量(mm)	製作技法等	釉 薬	時代	備 考
				①成形技法 ②調整技法及び形態等の特徴	①種類 ②施釉方法 ③施釉位置 ④色調		①文様 ②遺存状況 ③製作地 ④その他
15	1 B区上層	碗	器高 63.5 口径 (137.5) 高台径 48.5	①轆轤水挽き。②削り出し内反り高台。底部外面から体部外面下方にかけ回転ヘラ削り。	①鉄釉。②漬け掛け。③高台周辺を除き全面。底部外面は露胎。④茶を基調とし黒ムラが全体に広がる。	16C	②底部完存。口縁部若干。③瀬戸。④天目茶碗。
16	1 B区上層 一括	碗	高台径 53.0	①轆轤水挽き。②削り出し内反り高台。底部外面中央部回転ナデ。底部外面から体部外面下方にかけ回転ヘラ削り。	同 上	16C	②底部完存。底部周辺若干。③瀬戸。
17	1 C区上層 一括	碗	器高 53.5 口径 113.0 高台径 40.0	①轆轤水挽き。②削り出し輪高台。底部外面から体部外面下方にかけ回転ヘラ削り。体部外面上方は回転ナデ。	①灰釉。②漬け掛け。③内面は全面。外面は口縁部周辺。底部外面は露胎。④暗緑色(うぐいす色)を呈し、流れ、たまりが見られる。	17~ 18C	②口縁部1/2を欠損。③唐津。④丸碗。
18	1 C区上層 一括	碗	口径 (104.0)	①轆轤水挽き。	①鉄釉。②遺存部は総て。④茶色。	17C	②口縁部1/3破片 ③瀬戸。④天目茶碗。
19	1 C区中層 一括	碗	器高 54.5 口径 119.5 高台径 49.5	①轆轤水挽き。②削り出し輪高台。底部外面から体部外面下方にかけ回転ヘラ削り。	①灰釉。②漬け掛け。③高台周辺を除き全面。底部外面は露胎。④薄い暗緑色がかかった白色。	18C	②底部完存。口縁部若干。③唐津。1mm大の濃紫色の粒子を若干含む。④丸碗。
20	1 C区上層 一括	碗	高台径 41.0	①轆轤水挽き。②削り出し輪高台。底部外面から体部外面下方にかけ回転ヘラ削り。	①鉄釉。②漬け掛け。③高台周辺を除き全面。底部外面は露胎。④黒を基調とし糸状及び天状に茶色を呈する。	17C	②底部のみ完存。③瀬戸。④黒色粒を若干含む。
21	1 D区上層	碗	高台径 (49.0)	①轆轤水挽き。②削り出し輪高台。底部外面から体部外面下方にかけ回転ヘラ削り。体部外面上方回転ナデ。	①灰釉。③遺存部は内面のみ。底部外面は露胎。④暗緑色(うぐいす色)。	18C	②底部1/4残す。③瀬戸。
22	1 E区覆土 一括	碗	口径 (129.0)	①轆轤水挽き。	①灰釉。③遺存部は総て施釉。④薄い暗緑色(うぐいす色)	17C	②口縁部若干。③瀬戸。④黒色粒子を若干含む。天目茶碗。

注 法量の()は復元推定値。

遺物 No.	遺構 出土層位	器種	法量(mm)	製作技法等	釉薬	時代	備考
				①成形技法 ②調整技法及び形態等の特徴	①種類 ②施釉方法 ③施釉位置 ④色調		①文様 ②遺存状況 ③製作地 ④その他
23	旧河道 B区上層 一括	碗	器高 74.5 口径 107.0 高台径 49.5	①轆轤水挽き。②付高台?	③高台接地面を除き全面。④にごった黄褐色を基調とし、茶色のムラがある。	?	②口縁部1/3を除き完存。③唐津。④丸碗。
24	旧河道 上層一括	碗	高台径 48.5	①轆轤水挽き。②付高台。底部外面から体部外面下方にかけ回転ヘラ削り。	①鉄釉。 ②漬け掛け。③底部周辺を除き全面。高台は露胎。④黒褐色を基調とし、細粒状のムラが全体に見られる。	17C	②底部のみ完存。③瀬戸。④底部外面に「ふ」または「小」墨書。重ね書きしている。
25	旧河道 C区上層 一括	碗	高台径 41.5	①轆轤水挽き。②付高台。底部外面から体部外面下方にかけ回転ヘラ削り後ナデ。底部外面中央部を「ノ」字にナデ。高台の付け方は雑で接合部にスキ間が見られる。	①鉄釉。 ②漬け掛け。③底部周辺を除き全面。底部外面は露胎。④黒色を基調とし微細粒状のムラを霜降り状に有する。	17C	②底部完存。体部上方1/4残存。③瀬戸。④底部外面に「衆」墨書。
26	旧河道 D区上層 一括	碗?	—	①轆轤水挽き。②削り出し高台。底部外面中央部に回転糸切り痕。高台接地面から側面は回転ヘラ削り。	①鉄釉。②底部内面底部外面は露胎。釉は薄く、やや緑がかかった黒色。	?	②高台部1/3破片 ③瀬戸。
27	1 B区上層 一括	香炉	口径 (11.0)	①轆轤水挽き。②底部外面回転ヘラ削り。	①鉄釉。②漬け掛け。③底部を除き全面。④薄茶色を基調とし、緑色のムラが見られる。	18C前	①半菊文の陰刻。②口縁～底部1/5破片。③美濃。④黄瀬戸。
28	1 B区上層 一括	香炉	口径 (103.0)	①轆轤水挽き。	①鉄釉。②漬け掛け。③外面は残存部全面。内面は口縁部のみ。④緑がかかった黒褐色を基調とする。	17C	②口縁部小破片。④白色砂粒を若干含む。
29	1 B区上層 一括	鉢	—	①粘土紐輪積み。	①白色釉。②刷毛塗り。③内面のみ。④白乳色	18C	②体部小破片。③唐津。④白色細砂粒をまばらに含む。
30	1 C区中層 一括	香炉	—	①轆轤水挽き。②底部外面から体部外面下方にかけ回転ヘラ削り。体部下端に指頭による凹が見られる。	①鉄釉。②漬け掛け。③外面のみ施釉。体部下端～底部を除き遺存部全面。④淡黄褐色を基調とし、一部灰色のムラが見られる。	?	②体部～底部の小破片。③瀬戸。④外面に長石粒が集中して溶着。0.5mm大の砂粒を若干含む。

注 法量の()は復元推定値。

遺物 No.	遺 構 出土層位	器 種	法量(mm)	製作技法等	釉 薬	時代	備 考
				①成形技法 ②調整技 法及び形態等の特徴	①種類 ②施釉方法 ③施釉位置 ④色調		①文様 ②遺存状況 ③製作地 ④その他
31	1 C区上層 一括	鉢	高台径(181.0)	①粘土紐輪積み。②付 高台。底部外面から体 部外面下方にかけ回転 ヘラ削り。	①鉄釉・緑釉・灰釉。② 文様は鉄釉で筆による。 緑釉はしずく状に一ケ 所。灰釉は高台外側面 と底部外面中央を除く 全面に刷毛塗り。④文 様はこげ茶色。暗緑色 のしずくが飛ぶ。地は クリーム色に淡茶褐色 のムラ。	17C	①内側に草文。②底部 周辺の小破片。③美濃。 ④内面に目あとが1ヶ 所。
32	1 D区上層	壺	口径(131.0)	①轆轤水挽き。②耳状 の把手が付く。	①鉄釉。②漬け掛け。 ③遺存部は外面全面内 面口縁部付近のみ④黒 色を主体とし、茶色の ムラが多い。	17C	②口縁部小破片。③瀬 戸。④双耳壺か?
33	1 D区上層 一括	香炉	口径(160.0)	①轆轤水挽き。②口縁 部にかえりを有する。	①鉄釉。②遺存部は外 面～口縁部のかえりの 平坦部のみ。④こげ茶 色。	17C	②口縁部小破片。
34	E区上層 一括	ハサミ 皿	器高 23.5 口径(114.0) 底径(44.0)	①轆轤水挽き。②底部 は回転糸切り離し痕を そのまま残存。	①灰釉。②内側は口縁 部全面と底部の一部。 外側は体部中央に。④ 暗緑色。	16C	②全体の1/6破片。④ 1～3mm大の砂粒をま ばらに含む。
35	4 上層一括	皿	口径(110.0)	①轆轤水挽き。②内外 面ナデ。	①灰釉。②漬け掛け。 ③口縁部、内外面上端 部。④薄い暗緑色	15C末	②口縁部小破片。③瀬 戸。④緑釉小皿。
36	旧河道 D区中層 一括	壺	口径(109.0)	①轆轤水挽き。	①鉄釉。②漬け掛け。 ③外面及び口縁～頸部 の内面。④黒褐色を基 調とし、茶色のムラが 多い。	?	②口縁部1/5破片。③ 瀬戸。
37	旧河道 D区上層 一括	鉢	高台径(156.5)	①粘土紐輪積み。②付 高台。底部外面から体 部外面下方にかけ回転 ヘラ削り。	①鉄釉、灰釉。②③文 様は鉄釉で筆による。 灰釉は底部外側中央を 除く全面。④文様はコ ゲ茶色。地は暗いクリ ーム色。	17C	①内側に草文。②底部 周辺の小破片。③美濃。 ④内側に目あとが5ヶ 所。
38	1 A区上層 一括 B区一括	鉢	器高 127.0 口径 322.0 底径 105.0	①粘土紐輪積み。②底 部外面に糸切痕が残る。 体部外面下半をヘラ削り。 上半から内面はナデ。	①鉄釉。③全面。④紫 がかった薄茶色。光沢 がない。	17C	②底部完存。口縁部1 /3。③瀬戸美濃。④ 底部は摩耗が著しく、 中央に穴が開いている。

注 法量の()は復元推定値。

遺物 No.	遺 構 出土層位	器 種	法量(mm)	製作技法等	釉 薬	時代	備 考
				①成形技法 ②調整技 法及び形態等の特徴	①種類 ②施釉方法 ③施釉位置 ④色調		①文様 ②遺存状況 ③製作地 ④その他
38				23本櫛歯で7単位。			④搨鉢。1～3mm大の 粘土粒をまばらに含む。
39	1 B区上層 — 括 D区上層 — 括	鉢	底径(150.5)	①粘土紐輪積み。②底 部外面に糸切痕が残る。 外面は中位までヘラ削 り。13本櫛歯による。	①鉄釉。③底部～体部 下方の外側の一部は露 胎。④茶色～こげ茶色。 光沢がある。	18C	②底部付近の小破片。 ④搨鉢。1～3mm大の 粘土粒をまばらに1mm 大の白色砂粒を若干含 む。
40	1 C区上層 — 括	鉢	—	①粘土紐輪積み。口縁 は内側の一部は押えら れて片口状になっている。 12本櫛歯。	①鉄釉。③遺存部は全 面。④暗茶褐色。光沢 がある。	?	②口縁部小破片。③瀬 戸。④搨鉢。0.5mm大 の白色砂粒を若干含む。
41	旧河道 C区上層 — 括	鉢	—	①粘土紐輪積み。②外 面下半は凹凸があり、 指頭の押えが見られる。 5本櫛歯。	①鉄釉。③遺存部は全 面。④薄い暗橙褐色。 光沢がない。	16～17 C	②胴部小破片。③丹沢 又は信楽。④搨鉢。 0.5mm大の砂粒を多く 含む。
42	旧河道 D区上層 — 括	鉢	—	①粘土紐輪積み。②口 唇部上部は沈線状に凹 んでいる。5本櫛歯。	①鉄釉。③遺存部は全 面。④内面灰褐色。外 面黒褐色。 光沢がない。	?	②口縁部小破片。④搨 鉢。砂質の胎土である。
43	1 B区上層 — 括	鉢	—	①粘土紐輪積み。	①鉄釉。③遺存部は全 面。④紫がかったこげ 茶色。光沢がない。	?	②口縁部小破片。③瀬 戸?。④0.5mm大の砂粒 を若干含む。
44	1 E区上層 — 括	鉢	—	①粘土紐輪積み。	①鉄釉。③遺存部は全 面。④紫がかったこげ 茶色。光沢がない。	?	②口唇部小破片。③瀬 戸?。
45	1 E区上層 — 括	鉢	—	①粘土紐輪積み。	①鉄釉。③遺存部は全 面。④紫がかったこげ 茶色。光沢がある。	?	②口縁部小破片。③瀬 戸美濃。④0.5～2mm 大の白色粒をまばらに 含む。
46	旧河道 D区上層 — 括	鉢	口径(322.0)	①粘土紐輪積み。	①鉄釉。③遺存部は全 面。④紫がかったこ げ茶色。光沢がある。	16C	②口縁部1/3。④1mm 大の白色砂粒をまばら に含む。
47	1 C区上層 — 括	甕	—	①粘土紐輪積み。②折 り返られた口縁は下端 で胴部に接し、中空部 を作っている。	①鉄釉。③遺存部は全 面。④内面黒茶褐色。 外面光沢のある茶色。	16C	②口縁部小破片。④1 mm大の砂粒を多く含む。

注 法量の()は復元推定値。

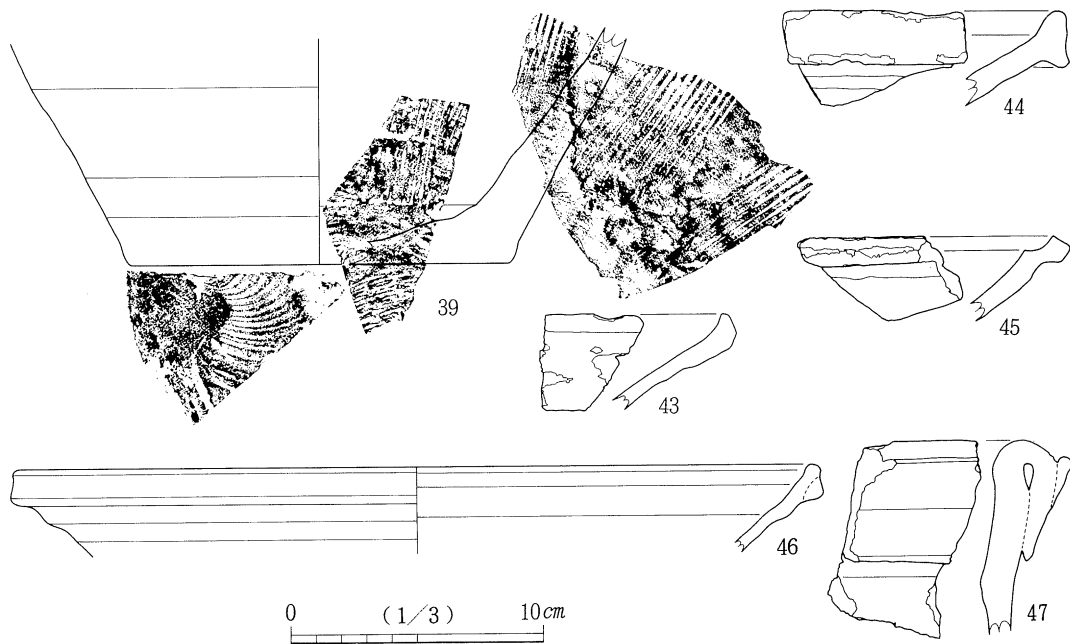


図16 遺物実測図(4)陶器

7. 中世石塔 (図17・18, 表8, 図版14)

石塔類としては、板碑・五輪塔・宝篋印塔を併せて108点出土している。このうち中世の所産と考えられる五輪塔および宝篋印塔は37点であった。1号遺構・4号遺構および旧河道覆土から出土している。五輪塔には空風輪・火輪・水輪・地輪がみられ、完存しているものが比較的に多く見られる。五輪塔に比べ、宝篋印塔の遺存度はあまり良くない。図示した相輪および笠のうち、61の相輪はほぼ完存しているが、他は部位の破片にとどまっている。しかし、笠は隅飾突起の形態が良く残っており、古い様相が端部の立ち上がりに観察される。

8. 布目瓦 (図19, 表9, 図版15)

布目瓦は1号遺構のみからの出土であり、14点であった。いずれも小片であって、図示し得たものは9点にすぎなかった。凸面に縄叩き目のある平瓦が殆んどであるが、69に掲げた軒瓦の破片も含まれている。また、73に掲げた平瓦の凸面は斜格子叩き目であり、他とは異なっている。凹面の観察では、縦方向に糸切痕の残るものがみられ、整形の際に用いられた布の端部圧痕にも、まつられているものとまつられていないものとがみられている。

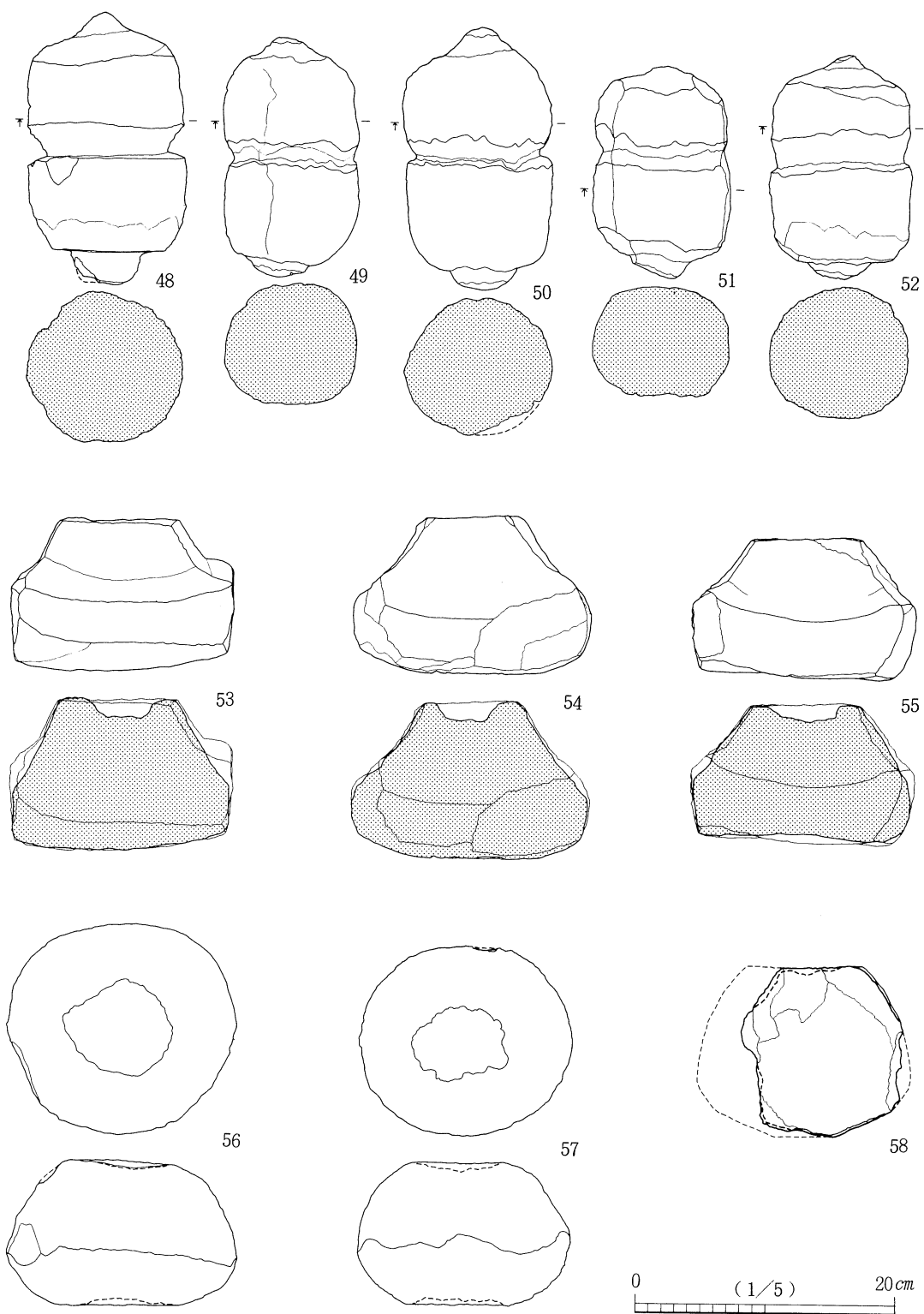


图17 遺物実測図(5)石塔

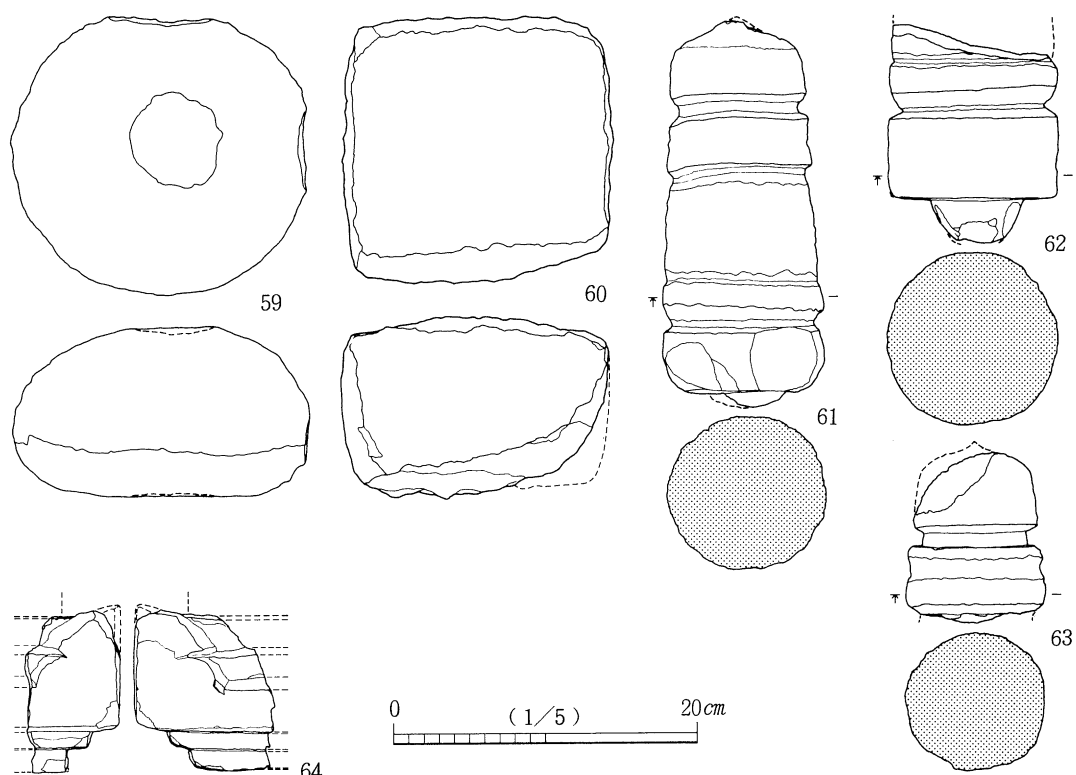


図18 遺物実測図(6)石塔

表8 中世石塔一覽表

遺構No.	種類	遺構	出土状況	備考
48	五輪塔 空風輪	1	B区 上層	一部欠損
49	" "	"	B区 上層	完存
50	" "	"	D区 中層	完存
51	" "	旧河道	D区上層一拵	完存
52	" "	"	D区上層一拵	完存
53	" 火輪	1	B区 上層	完存
54	" "	"	B区 上層	一部欠損
55	" "	"	B区 上層	一部欠損
56	" 水輪	1	B区 上層	完存
57	" "	"	C区上層一拵	ほぼ完存
58	" "	"	C区上層一拵	1/2残存
59	" "	旧河道	D区上層一拵	完存
60	" 地輪	1	B区 上層	一部摩滅
61	宝篋印塔 相輪	1	B区 上層	一部欠損
62	" "	"	B区 上層	下端部破片
63	" "	"	D区 上層	上端部破片
64	" 笠	1	B区 中層	隅飾突起部の小破片

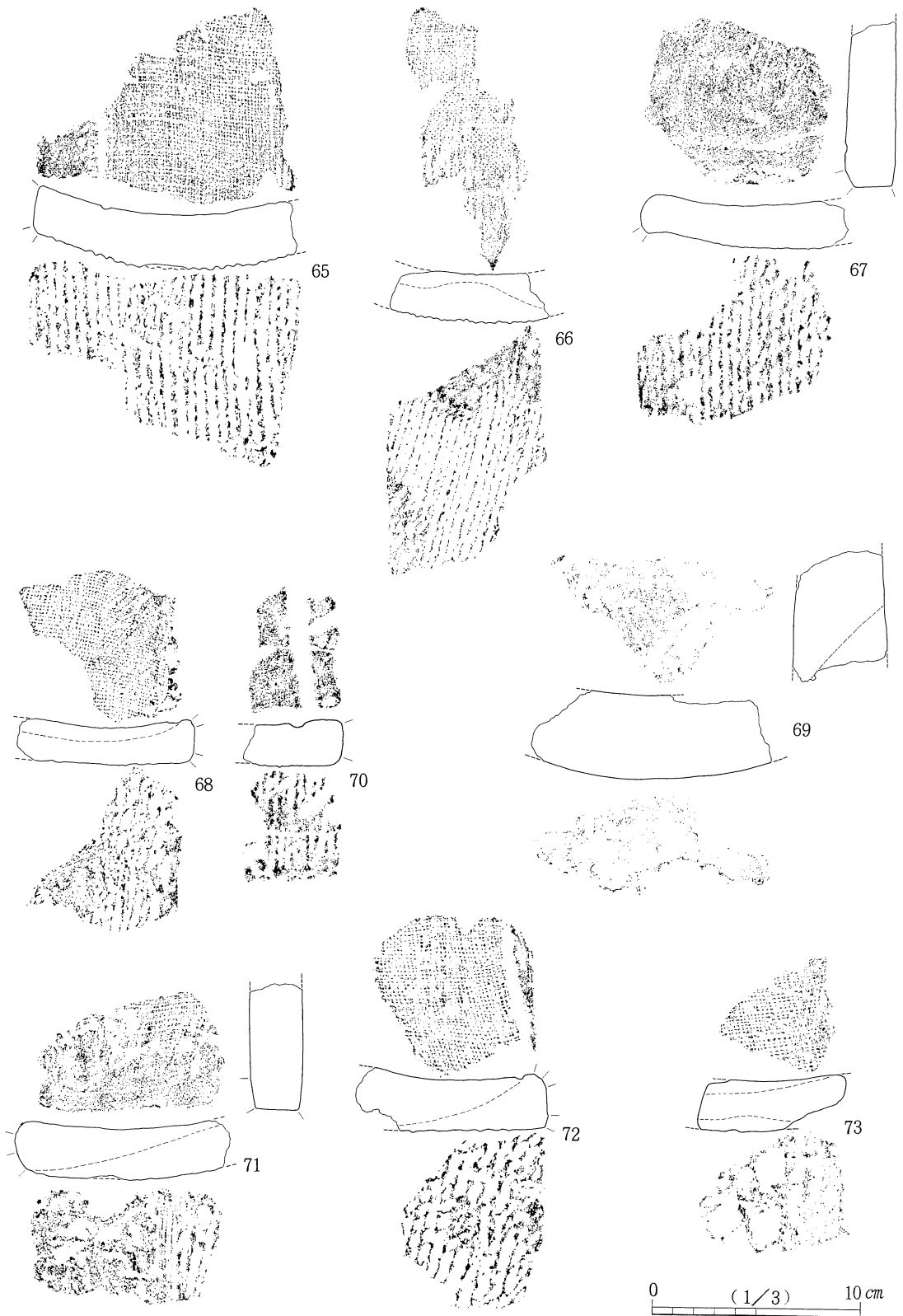


图19 遺物実測図(7) 布目瓦

表9 布目瓦一覧表

遺物 No.	遺構	出土状況	種類	胎土	焼成	色調	成形・調整・その他
65	1	A区中層	平瓦	砂粒を若干、細砂粒を多く含むが良好。	ややあまい。	明灰色。	凹面：右上から左下へ糸切り痕が若干残る。側面から30mm離れて布端部痕が見られる。凸面：縄叩き目。側面：凸面に狭い面取りを一面行なっている。
66	1	A区上層 一括	平瓦	細砂粒を多く含むも良好。	やや良好。	淡灰色。	凹面：広端面近くの布端部(まっつていない)痕が見られる。凸面：縄叩き目。広端面近くには指頭痕を残す。断面に粘土合わせ痕が観察できる。
67	1	B区上層	平瓦	細砂粒を多く含む、特に石英質の砂粒をまばらに含むことを特徴とする。	あまい。	表面は淡褐色。断面は灰色。	凹面：広端面から17mm程離れて布端部痕(まっつてある)が見られる。凸面：縄叩き目。広端面：平端面と凹面に寝かせて広い面取りをしている。側面：凹面から連続する布目と思われる痕が見られるが不明瞭。凸面側には狭い面取りを一面行なっている。全体的に磨耗が著しい。
68	1	B区上層	平瓦	細砂粒少なく、良好。	ややあまい。	淡茶褐色。	凹面：右上から左下へ糸切り痕が若干残る。側面から5mm離れて布端部痕が見られる。凸面：縄叩き目。側面：凹面と凸面の両側に狭い面取りを一面つつ作る。断面に粘土合わせ痕が観察できる。
69	1	B区上層	軒平瓦	砂粒をまばらに含む。	良好。	灰色。	頸部に近い部分と思われ、頸部との接合痕が明瞭に残る。凹面：布目痕が弱く残る。凸面：狭端側は削りの後なでっており、頸部側は指頭による押え痕が残る。
70	1	B区中層 一括	平瓦	細砂粒は少なく良好。	極めてあまい。	表面は明灰色。断面は灰色。	凹面：側面から17mm離れて布端部痕が見られる。凸面：縄叩き目。側面：平端面のみの削り。全体的に磨耗が著しい。
71	1	C区中層	平瓦	砂粒を若干、細砂粒を多く含む。	やや良好。	明灰色。	凹面：広端面から15～25mm離れて布端部(まっつてない)が見られる。凸面：縄叩き目。広端面：平坦面と凹面側にかなり寝かせて一面見られる。側面：破損、磨耗が著しく不明確であるが、末端部と凸面側の面取りを行なっている。断面に粘土合わせ痕が観察できる。
72	1	C区上層	平瓦	細砂粒は少ない。	良好。	淡灰色。	凹面：右上から左下へ糸切り痕が残る。側面から5mm離れて布端部痕が見られる。凸面：縄叩き目。側面：凹面側に2面と凸面側に1面の面取りを有す。断面に粘土合わせ痕が観察できる。
73	1	C区上層 一括	平瓦	砂粒、細砂粒とともに多く不良。	あまい。	淡灰色～灰色。	凹面：縦方向の糸切り痕が残る。凸面：斜格子叩き目。粘土接合部でののがれ痕が残る(拓本右側)。断面に粘土合わせ痕が観察できる。

9. 貨幣 (図20, 表10, 図版15)

貨幣は1号遺構3点・3号遺構2点・5号遺構1点の計6点であった。いずれも覆土最上層からの出土である。貨幣の種類は寛永通宝と渡来銭系の不明古銭であり、寛永通宝には古寛永と新寛永とがみられる。1号遺構のものも3号遺構のものもまとまった状態で出土している。

10. その他の遺物 (図21, 表11, 図版15)

その他の遺物としては、1号遺構からガラス玉・銅製香炉・キセル・3号遺構から土錘、

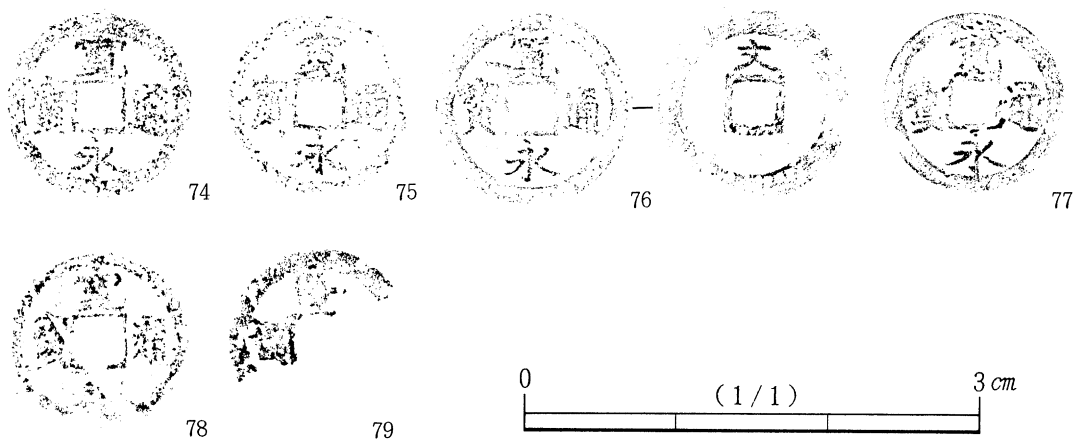


図20 遺物実測図(8)貨幣

表10 貨幣一覧表

遺物 No.	遺構	出土状況	銭名	計測数値(mm)			備考
				径	孔幅	厚さ	
74	1	D区最上層一括。 まとまって出土。	寛永通宝	25.20	5.20	1.65	古寛永。
75	〃		寛永通宝	24.55	5.65	1.55	新寛永。
76	〃		寛永通宝	25.70	5.85	1.40	新寛永。「文」銭。
77	3	南西部最上層一括	寛永通宝	24.25	5.35	1.25	古寛永。
78	〃	密着して出土。	寛永通宝	24.75	5.95	1.20	古寛永。極めて薄い。
79	5	最上層一括。	不明	24.55	5.75	0.95	渡来銭系と思われる。

6号遺構から布、旧河道から鉄滓・土錘・骨が出土している。このうち、81に掲げた銅製の香炉は、D区の遺構壁面に密着して出土しており、体部外面に亀甲文が施こされている。85に掲げた鉄滓は、鍛冶碗形滓の破片である。フィゴの羽口などの関連する遺物は出土していないが、調査地点から南へ下った所に旧字名「カナクソ」が、また、東側字寺中の東端に消滅字名「金クソ」が知られている。(参照 P. 8 図5)

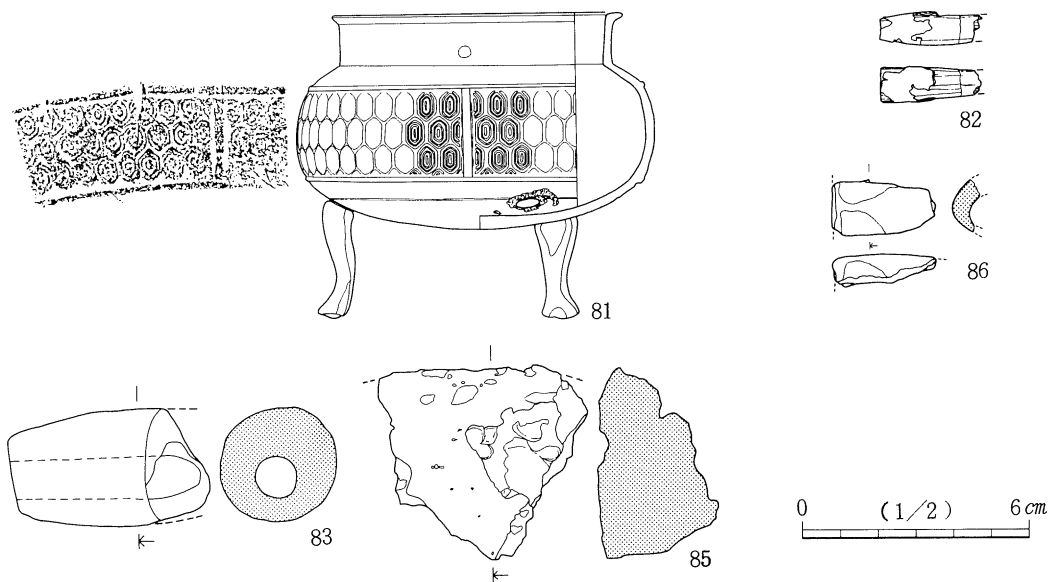


図21 遺物実測図(9)その他

表11 その他の遺物一覧表

遺物 No.	種類	遺構	出土状況	備考
80	ガラス玉	1	B区上層	実測図、写真なし。
81	銅製香炉	〃	D区壁密着	脚を一本欠くもほぼ完存。
82	キセル	〃	D区最上層一括	吸口と思われる。羅字を残す。
83	土錘	3	上層	半欠。
84	布	6	下層一括	実測図、写真なし。
85	鉄滓	旧河道	B区上層一括	鍛冶碗形滓の破片。重量106.5g。
86	土錘	〃	C区上層一括	小破片。
87	骨	〃	D区上層一括	実測図、写真なし。

VI. ま と め

本遺跡は、中世城郭を主体とした遺跡である。ただ、この「城郭」としての性格付けは、伝承・史料(Ⅱ章参照)・歴史地理学的な評価(Ⅲ章参照)に負うところが大きく、今回の発掘調査によって検出された、茶器等の陶器群・銅製香炉・石塔群・近世土葬墓・近世墓石などは、むしろ「中世寺院」の存在を際立たせている。構造が不明確で、あまり深くもない堀状遺構のみから「城郭」を強調することは、考古学的には心許ないと言えよう。

沖積面との比高差がほとんどない自然堤防上という地理的環境の「城郭」で、寺院の存在が際立っていたことは、城郭機能の低さを示しており、むしろ豪族居館・根小屋、馬場などの日常生活の場としての性格が強かったことが想定される。本地が「国府推定地」に比定(文献a)されている要件の一つとしての養老川水運との関係は、政治・経済面での要所であるところを示すと同時に、城郭としては不向きであることを物語っている。城郭としての機能は、他の場所に求めた可能性も考えられよう。

ただ、考古学的資料にこだわらず、前述の文献史料や歴史地理学的評価などから総合的に判断するならば、村上「城」の存在を推定することは可能であり、16世紀における、椎津城を中心とした養老川下流域での、里見氏～後北条氏～豊臣氏による勢力権交代の歴史を明らかにする資料の一端となり得るものと思われる。

一方、本遺跡を、発掘範囲内における調査結果のみに限定して、中世寺院関連資料と捉え、検出された堀や残存する土塁を、寺院構造の一部と考えると、狭い調査範囲でこれだけの多彩・多量の遺物が出土していることなどからも、かなり大規模な寺院の存在が推定される。今回の調査では、寺城南西端部の一角を発掘したことになるのであろうか。

本遺跡のもう一つの特徴は、「上総国府推定地」の対象となっていることである。これについては、本調査区の隣接地を調査した時の報告によって詳しく述べられている(文献b)ので省略するが、今回の調査では、布目瓦片が14点出土し肯定的要素として注目されるが、一方で該当時期の遺構は全く検出されなかった。また、調査区周辺地域における「中世寺院」の規模を大きく捉えることは、「寺脇・寺中・門前・大門・大門前」という小字の評価にかかわるものであった。いずれにしても、今回の調査では「上総国府」の位置を推定できる資料は検出されていない。

文 献 a : 1976年 須田 勉 「上総国府の諸問題」『古代 第61号』早稲田大学考古学会

b : 1985年 田所 真 「上総国府推定地」『市原市文化財センター年報昭和57・58年度』



村上城跡周辺航空写真 (1967年3月撮影 1:13,000)



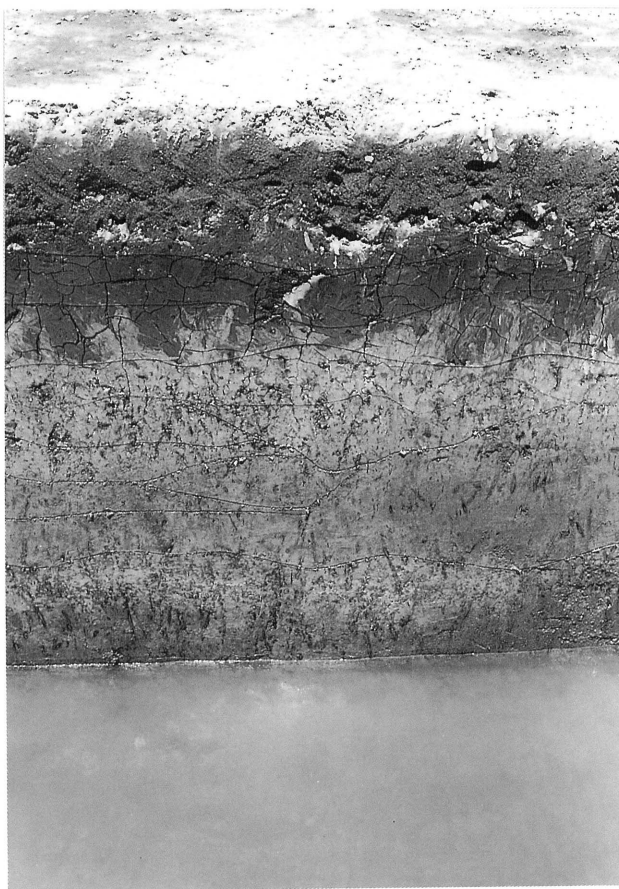
1. 遺跡遠景（南東側よりのぞむ）手前が今回の調査地 遠景校舎が1983年調査地



2. 遺跡遠景（南東側よりのぞむ）1983年調査におけるトレンチ配置状況



1. 遺跡遠景（南東側よりのぞむ）二階屋の右側に土塁が残っている。



2. 基本土層



1. 1号遺構全景（北西側よりのぞむ）二階屋の左側に土塁が残っている。



2. 1号遺構近景（西側よりのぞむ）



1. 1号遺構全景（南東側よりのぞむ）

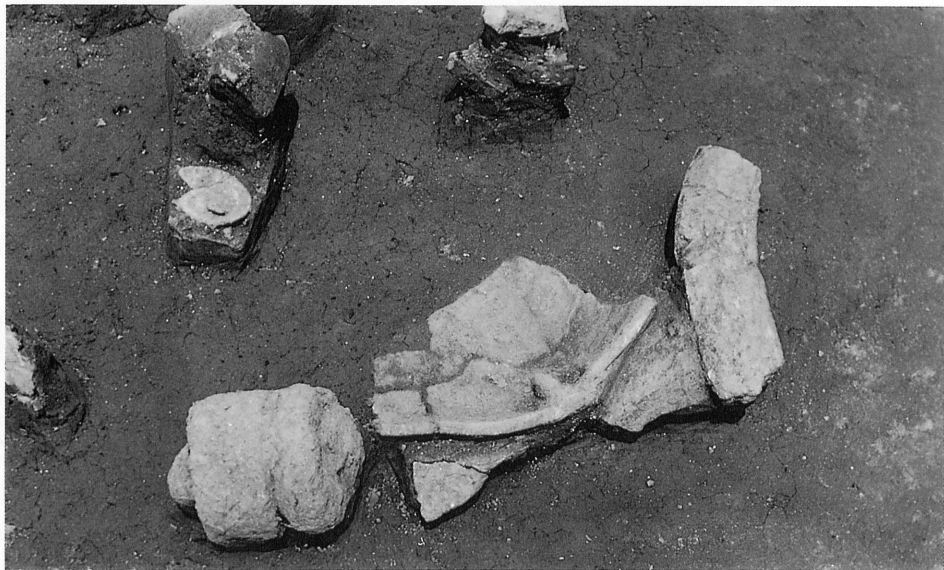


2. 1号遺構北半部遺物出土状況（東側よりのぞむ）確認面から極めて浅い位置で出土している。

1. 1号遺構北西半部遺物出土状況（東側よりのぞむ）



2. 1号遺構北西半部遺物出土状況（南東側よりのぞむ）



3. 1号遺構南東部遺物出土状況（南東側よりのぞむ）





1. 3号遺構全景（北東側よりのぞむ）



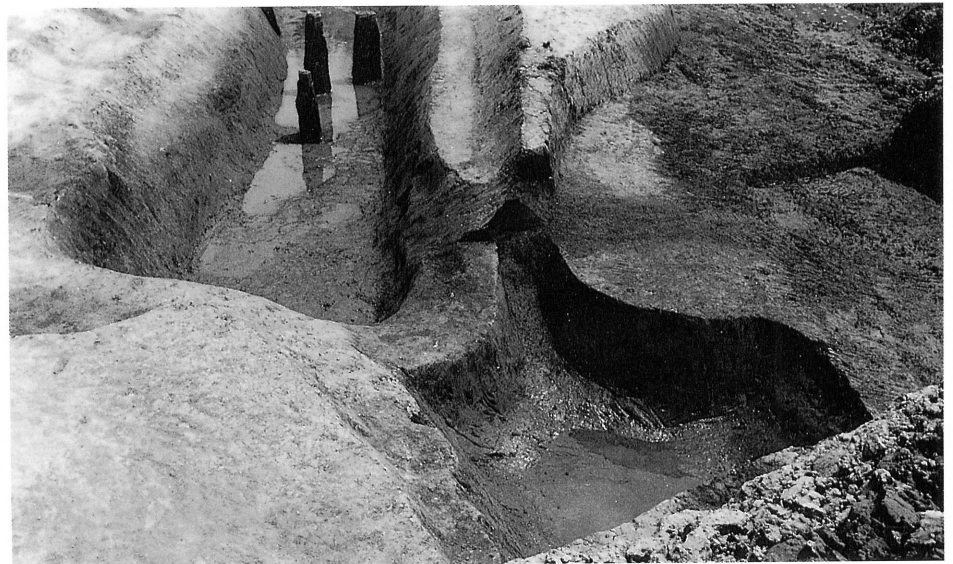
2. 4号遺構近景（西側よりのぞむ）調査途中



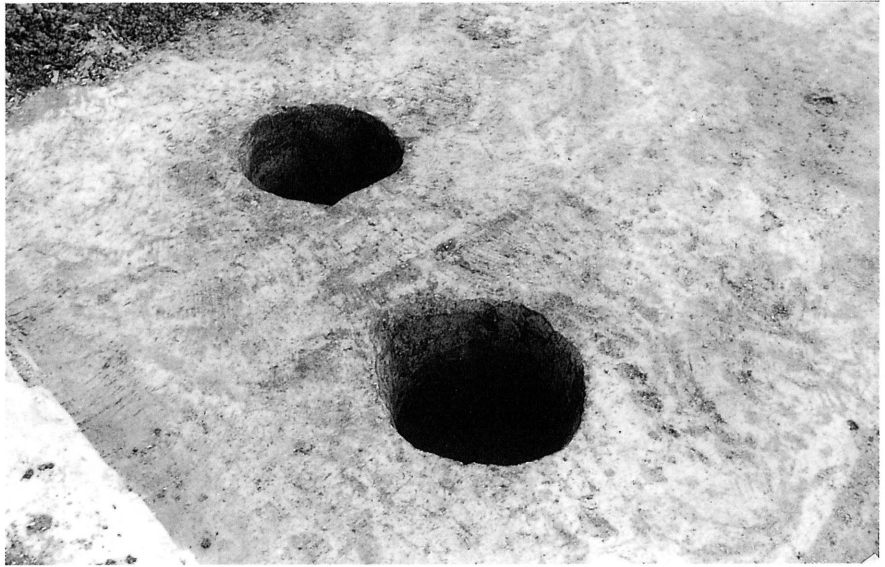
1. 4号遺構周辺近景（北側よりのぞむ）調査途中



2. 4号遺構全景（北側よりのぞむ）



3. 4号遺構全景（北西側よりのぞむ）



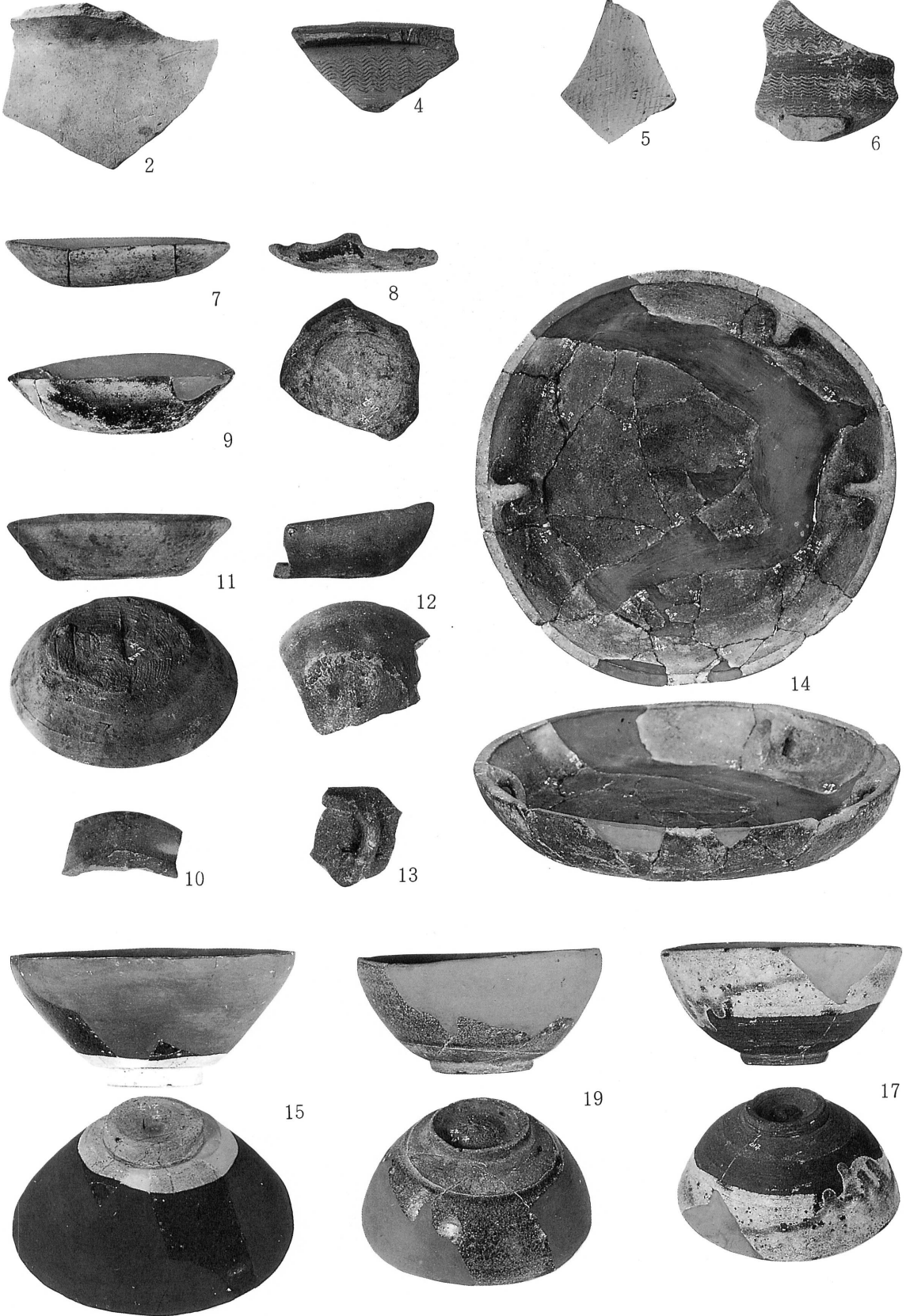
1. 5・6号
遺構検出状
況（北側よ
りのぞむ）



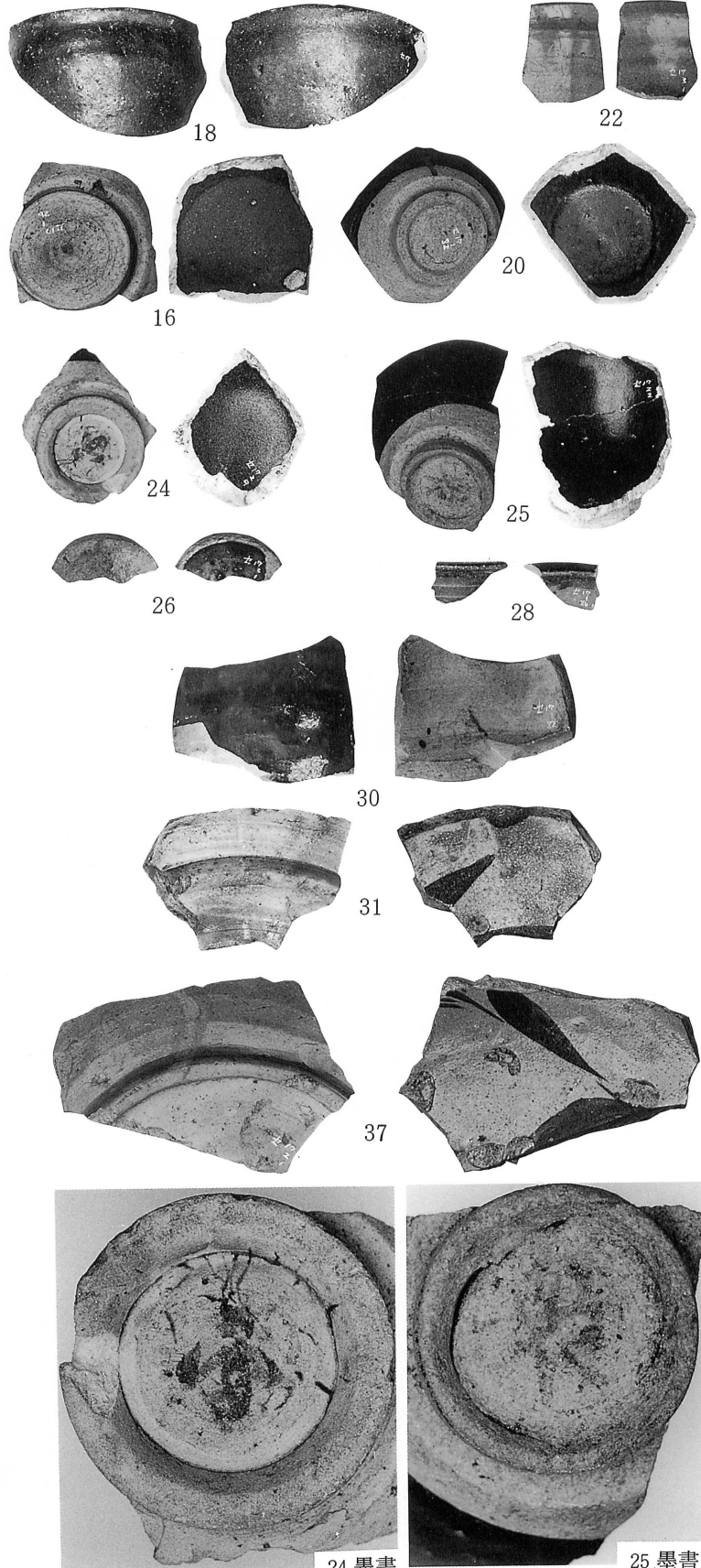
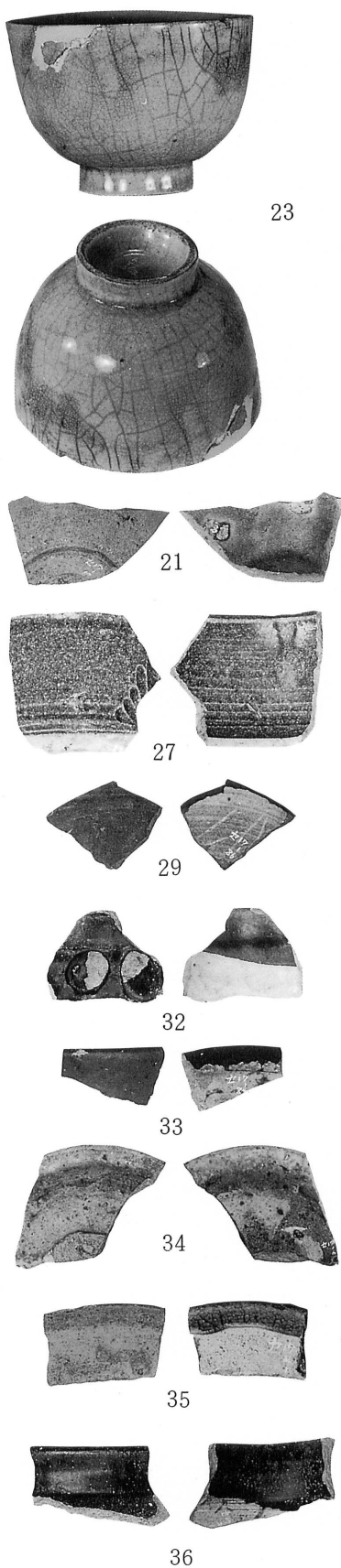
2. 5号遺構
全景（北側
よりのぞむ）



3. 6号遺構
全景（北側
よりのぞむ）



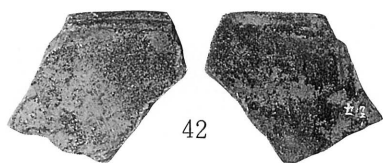
土師器・須恵器、土師質杯形土器・土鍋・陶器



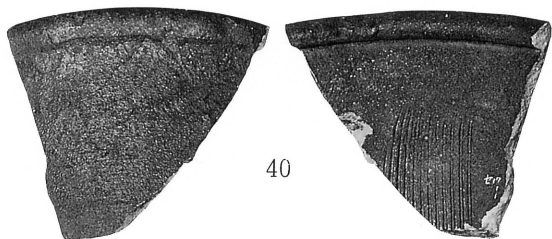
陶器



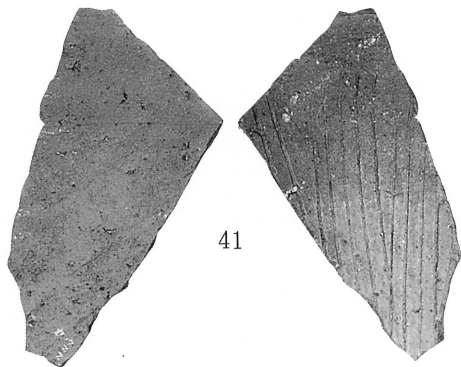
38



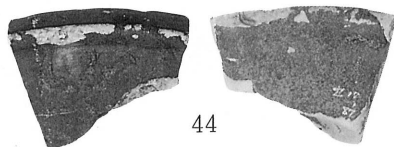
42



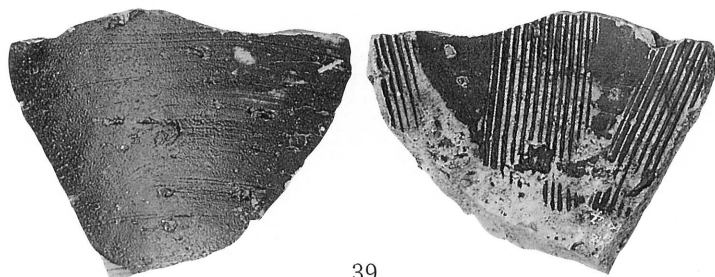
40



41



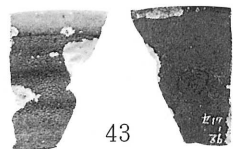
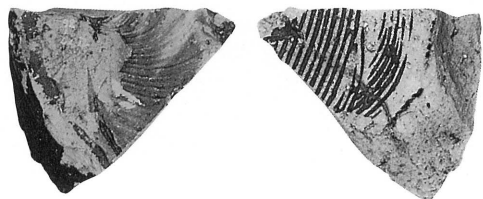
44



39



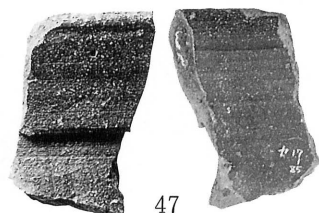
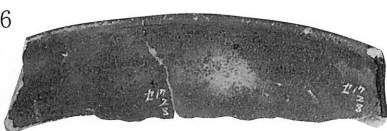
45



43



46



47



48



49



50



51



52



53



54



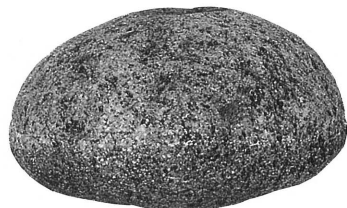
55



56



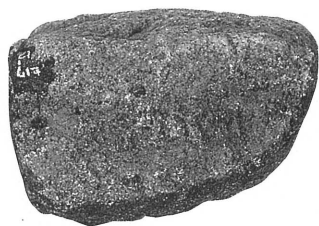
57



59



58



60

板碑片



61



62



63



64





65



66



67



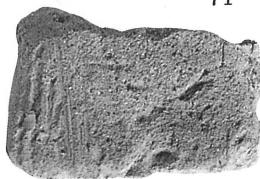
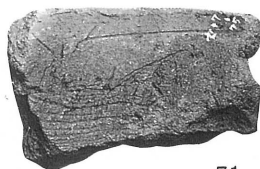
68



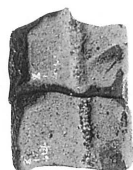
71



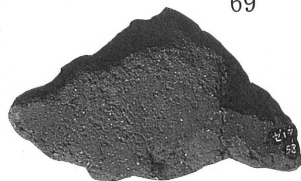
72



81



70



69



73



82



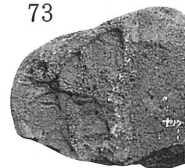
83



86



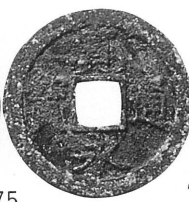
85



74



75



76



77



78



79

村 上 城 跡

昭和61年3月25日 印刷

昭和61年3月31日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 市 原 市 教 育 委 員 会
財団法人 市原市文化財センター

印 刷 (株)国際技報舎市原営業所

千葉県市原市惣社867-18

T E L 0436(21)2355